

学科目名	漁具漁法学概論	単位数	2単位	必修選択の別	選
	Fundamentals of Fishing Gear and Fishing Techniques	教員名 メールアドレス	梶川和武 kajikawa@fish-u.ac.jp		
	学習・教育到達目標：D（◎）				
履修年次・学期	1年 後期				
質 問 受 付	随時：E-mailによる予約が望ましい 三学科共用実験棟4F 教員研究室(412)				
授 業 概 要					
漁具の分類を通して各種漁具の構造・特性に関する基礎知識を習得する。漁具の運用に密接に関わる漁業生物の生態・行動の基礎知識を学習する。水産資源の持続的・科学的生産技術の基礎となる漁獲選択性と混獲防止に関する基礎知識を習得する。また、授業を進めるに当たり、本授業をより理解するために最新の水産に関する研究成果や概要を適宜紹介する。					
授 業 の 目 標					
一般目標：我が国の漁業生産に関する制度、漁具、漁法に関する基礎的な事項を理解する。また、漁具の設計ならびに運用に必要となる基礎事項を習得するとともに、水産資源の持続的・科学的生産技術に関する考え方を幅広く習得する。					
行動目標：修了者は我が国の漁業生産技術について説明でき、かつ、水産資源の持続的・科学的生産技術に関する基礎知識に基づいて、今後の漁業生産技術のあり方について考えられるようになる。					
回	授 業 計 画 ・ 内 容				
1	ガイダンス、漁具漁法学の概要について理解する				
2	日本の漁業の現状について、漁業の分類、資源管理制度、水揚高等を通して学ぶ				
4～5	日本の漁業制度(関係法令、漁業権漁業、許可漁業)について、学ぶ				
6	魚の習性を利用した集魚、漁獲機構について理解する。				
7	各種漁具の構造、漁法、漁獲機構について理解する。（網漁具）				
8	中間試験				
9～12	各種漁具の構造、漁法、漁獲機構について理解する。（網漁具）				
13～14	各種漁具の構造、漁法、漁獲機構について理解する。（釣漁具、雑漁具）				
15	まとめ				
キーワード	資源管理、責任ある漁業、混獲問題、省エネルギー、漁獲技術、漁獲選択性				
教科書 参考書	教科書：テキスト用オリジナルプリントを配布 参考書：「最新漁業技術一般」 野村正恒 成山堂 「漁具と魚の行動」 井上実 恒星社厚生閣 「日本漁具・漁法図説」 金田禎之 成山堂書店 「魚の行動と漁法」 井上実 恒星社厚生閣				
評価方法 評価基準	評価方法：試験評点（80％）、小テスト評点（20％）で評価する 評価基準：試験については、授業目標についての理解度、達成度を評価する。				
関連科目	基礎漁具力学、資源管理漁具設計論、漁具学実験				
履修要件	この学科目は指定受講年次に履修することが望ましい。				
教 育 方 法 ・ そ の 他					
対話型講義を心がけ、学生からの質問を頻繁に受ける。 授業時間に理解度確認のための小テストを実施する。					

学 科 目 名	線形代数 Linear Algebra	単位数	2 単位	必修選択の別	選
	学習・教育到達目標：C (◎)	教員名 メールアドレス	未定		
	履修年次・学期				
質 問 受 付	随時				
授 業 概 要					
線形代数は連立一次方程式の解に関する学問である。この講義ではまずベクトルと行列の足し算、掛け算からはじめ、それらと連立一次方程式の関係を学ぶ。また、我々が連立一次方程式を解く際に用いた操作が、行列における行基本変形に対応することを学び、その応用として行列の階数と連立一次方程式の関係を学ぶ。後半は行列式を学習し、行列の性質についてより深く研究する。この講義で扱う内容の応用として、行政で実際に使われる産業連関分析について学ぶ。					
授 業 の 目 標					
一般目標:行列の計算体系を使うことで、多変数の一次式に関する理論を簡潔かつ体系的に展開できることを理解する。また具体的な行列の計算（特に行基本変形）を通じて、一般的に成立する事実を実感する。					
行動目標:行列の基本的な演算を計算できる。行列の行基本変形を行える。行列を通じて連立一次方程式の解を計算できる。行列式の性質を暗唱できる。					
回	授 業 計 画 ・ 内 容				
1	集合と写像				
2～3	数ベクトルと行列の定義、行列の加法と積				
4～5	行列の基本変形と階段行列				
6～8	連立方程式の解法、逆行列の求め方				
9	置換、行列式の定義				
10～11	行列式の性質				
12～14	行列式の計算法、行列式を用いた逆行列の求め方				
15	線形代数の応用：産業連関分析				
キーワード	ベクトル、行列、基本変形、連立一次方程式、行列式、産業連関				
教科書 参考書	特に指定しない。				
評価方法 評価基準	期末試験(70%)と、レポート・小テスト(30%)による。				
関連科目					
履修要件					
教 育 方 法 ・ そ の 他					

学 科 目 名	水産流通経営セミナー Fisheries Information Management Seminar	単位数	2単位	必修選択の別	必
	学習・教育到達目標：F（◎）．D（○）．G（○）	教員名 メールアドレス	甫喜本憲 hokimoto@fish-u.ac.jp 田宮晴彦 htamiya@fish-u.ac.jp 大谷誠 mohtani@fish-u.ac.jp 刀禰一幸 k-tone@fish-u.ac.jp		
履修年次・学期	2年 前期				
質問受付	授業中、教官の指定する時間、担当教員研究室、水産情報館（大谷、研究室1）（刀禰、研究室4）三学科共用実験棟（甫喜本、211）（田宮、214）				
授 業 概 要					
水産業を取り巻く問題を取り上げた新聞、雑誌などの記事等を用いて水産業の理解を進めるとともに読解力を養う。また文書能力と発表能力を涵養するために、作文実習・ディベート・プレゼンテーションなどを行う。受講者の個人的関心にも配慮できるよう少人数で授業を行う。（講義は10名程度の少人数で行うため、2クラス程度のクラス分けを行い、授業は週2回実施）					
授 業 の 目 標					
一般目標：作文能力、資料収集能力、発表能力を習得する。水産流通経営学科に関係する専門書、特に経営・経済関係の諸論文に対する読解力をつける。 行動目標：専門レポートや卒業論文の基本となる文章の作成と発表ができるようになる。					
回	授 業 計 画 ・ 内 容				
1～2 3～4 5～7 8～10 11～13 14～15	田宮・刀禰 文章の書き方の基礎について理解する 与えられたキーワードに従って小論文を書く 受講者の小論文を全員が読み、上位3つを投票する 上位の小論文と下位の小論文について共通点検事項を周知の上、論議する 評論・討議を踏まえて各自の小論文を修正する 水産業の時事問題をキーワードに新たに小論文を書く。		甫喜本・大谷 ディベートの方法論を理解する 2チームに分かれ、立論と反対尋問を行う 反駁、最終弁論を行う 発表（プレゼンテーション）に必要な①発表内容の構成②視覚資料の作成③発表の姿勢、の基礎的知識を学習する 各自で準備した発表を行うことで発表能力を身に付ける		
キーワード	個性、読解力、表現力、ディベート				
教科書 参考書	参考書：『文章術－「伝わる書き方」の練習』樺島忠夫著(角川oneテーマ21) 『水産白書』（農林統計協会） 『ディベート入門』北岡俊明著（日本経済新聞社） ・授業に沿ったレジメ、プリントを配布する。				
評価方法 評価基準	評価方法：レポート及び口頭報告評点(60%)、表現力評点(40%)で総合的に判定する。 評価基準：レポート及び口頭発表については、授業目標についての理解度、達成度を評価する。				
関連科目	水産流通経営学科で開講している全ての共通・専門科目。特に、卒業論文及び就職活動における面接など				
履修要件	水産流通経営学科2年生は全員、必修科目				
教 育 方 法 ・ そ の 他					
毎回レポートの作成もしくは口頭発表やプレゼンテーションを行う。その都度、教員の評価を受ける。それに基づき、さらに新しい内容が付加していくシステムとなっている。なお、学生各自に自己の問題意識を探究するよう促す。					

学 科 目 名	水産物フードシステム実習	単位数	1 単位	必修選択の別	必
	Practical Work in Fishery Food System	教員名 メールアドレス	甫喜本憲hokimoto@fish-u.ac.jp 児玉工.jkodama@fish-u.ac.jp 佐々木浩子sasaki@fish-u.ac.jp 藤井陽介fujii@fish-u.ac.jp 刀禰一幸k-tone@fish-u.ac.jp		
	学習・教育到達目標：D（○）・G（◎） ・H（○）・I（○）				
履修年次・学期	1年 前期				
質問受付	随時 水情館2階（刀禰4研）三学科2F（甫喜本211、児玉218、佐々木207、藤井210）				
授 業 概 要					
入学して初めて実習を体験する学生に、水産現場の見学・実体験を通して水産業の理解を促進し、水産流通経営学科での学習の動機付けを行う実習である。具体的には、魚介類の基本的な調理・加工の技術を身につけるほか、漁業の生産現場、水産物卸売市場、水産物加工場、小売店等で用いられている技術や衛生管理手法を学び、水産物の生産から消費までのフードシステムを理解する。					
授 業 の 目 標					
一般目標：水産物の生産から消費までのフードシステムを理解するとともに、基本的な水産物の調理・加工技術を身につけ、4年間の学習を主体的に行えるようになる。 行動目標：①フードシステムの概念を説明できる。②基本的な水産物の調理・加工技術を身につけ、商品としての水産物を評価しうる能力をつける。③聞き取り調査やまとめの作業を通じて、問題解決能力を身につける。④水産経済や水産物流通において自分なりの関心事を見つける。					
回	授 業 計 画 ・ 内 容				
	（水産物調理技術・衛生管理方法を理解し習得する） ・対象水産物の漁獲方法や鮮度管理方法、品質の評価方法について学ぶ。 ・魚体の構造に即した3枚おろしなどの水産物の基本となる捌き方を学ぶ。 ・捌いた水産物を用いて刺身・焼く・煮るなどの調理を行い、基本的な調理技術を身につけるとともに、水産物の調理上の特性を理解する。 （水産物の生産から消費までの流通過程と各段階で用いる技術・衛生管理手法を学ぶ） ・内海・外海での海域環境が異なる山口県の水産業の概要と水産政策に関して、理解する ・漁業の生産現場の見学や漁業者への聞き取り調査を通して、漁業者の漁獲活動を取り巻く海洋環境や資源変動、生産技術、就業構造、漁獲量や価格変動、漁業経営について学び、漁業の実態を知る。聞き取り相手とのコミュニケーションの計り方を習得する。 ・水産物流通の基本となる卸売市場を見学し、その仕組みと鮮度・衛生管理手法・取引の方法等を学習する。 ・水産物仲卸業者や卸売業者の講義を受け、卸売市場を取り巻く状況と現状を理解する。 ・水産物加工場を見学し、加工技術と衛生管理、販売状況等について理解する。 ・水産物小売や道の駅で講義を受け、販売技術や衛生管理、販売状況、消費者の動向について把握する。 （学習した内容をレポートにまとめる） ・学習内容を理解し、課題の抽出と問題解決に向け各自でレポートにまとめる。（状況に応じ、変更することもある）				
キーワード	水産物調理技術、水産物加工技術、漁獲方法、鮮度・衛生管理、実態調査				
教科書 参考書	開講時にプリントを配布する。				
評価方法 評価基準	評価方法：各種レポート、提出物の評点で判定する（100％）。 評価基準：調査表、調査レポート、最終レポートをもとに授業目標に対する理解度、達成度を評価する。				
関連科目	水産物市場構造論、水産地域振興論、水産フィールド調査演習、水産経済学Ⅰ・Ⅱ				
履修要件	説明会に出席すること。				
教 育 方 法 ・ そ の 他					
説明会で実習内容に関する資料を配布するので予習しておくこと。水産物の調理・加工について知識として学ぶだけでなく、実際的な水産物の調理に親しみ、身のまわりの水産物及び水産物流通に関心が持てるように心がける。					

学 科 目 名	水産経営学	単位数	2 単位	必修選択の別	必
	Fisheries Business Administration	教員名 メールアドレス	田村 剛 g-tamura@fish-u.ac.jp		
	学習・教育到達目標：D（◎）				
履修年次・学期	2 年 前期				
質 問 受 付	授業の前後、三学科共用実験棟教員研究室216				
授 業 概 要					
一般的に「経営」とは、原材料調達から生産・販売における意思決定と実行のことである。活動主体は個人経営の場合もあれば、法人経営の場合もある。本講義では、企業（法人組織）を主な考察対象とし、経営のしくみをはじめ、企業の特徴や企業形態、組織形態、会計制度、リーダーシップ、企業の社会的責任などを学習する。これらの内容は水産業にも当てはまるため、まずは一般的経営学の基礎的な内容を理解し、最後の方で最新の研究成果や概要を適宜紹介しながら、水産業における経営学を学習する。					
授 業 の 目 標					
一般目標：①経営のしくみを理解し、一般経営学の基礎を身につける。②現在、企業が直面している課題と企業活動に影響を与えると考えられる社会経済情勢について理解する。					
行動目標：①組織や組織形態について理解し、学内外で組織活動を実践できる。②一般経営学を水産業に適用し、例えば企業形態や損益分岐点などについて説明できる。					
回	授 業 計 画 ・ 内 容				
1	ガイダンス：講義内容・評価方法と経営と経営学				
2～3	企業の特徴：一般的な 8 つの特徴				
4～6	企業の分類：公的企業と私企業、人的会社、株式会社				
7～8	組織と組織形態：身近な組織や組織形態				
9～10	会計制度：財務諸表（貸借対照表と損益計算書）と損益分岐点分析のしくみ				
11～12	リーダーシップ：考え方とこれまでの経験の振り返り				
13	企業の社会的責任：考え方やその具体的な内容				
14～15	水産経営学：水産業の現状と課題と水産業における経営学				
キーワード	意思決定、株式会社、経営組織、財務諸表、企業の社会的責任、水産政策				
教科書 参考書	最低限の資料はプリントとして配付する。必要に応じて講義中に指示する。				
評価方法 評価基準	評価方法：期末レポート（70％）、小テスト（30％）で総合的に評価する。 評価基準：授業内容の理解度・達成度とし、特に期末レポートでは論理性も加味する。				
関連科目	水産制度論、水産経営分析論				
履修要件	経営活動は社会経済情勢の影響を受けるため、企業は常に情報収集・分析・対策が求められています。毎日、新聞などに目を通し、今社会で起こっている問題に対して敏感になるようにしましょう。				
教 育 方 法 ・ そ の 他					
・ 講義ではパワーポイントを用いて内容を説明し、学生がコメントシートに記入する形で進める。 ・ 講義の進捗状況に応じて、事前・事後学習として課題を課すことで理解の向上を図る予定である。 ・ 問合せや相談は、原則的には研究室に入室して行うこと。					

学 科 目 名	食料経済論 Food Economics	単位数	2単位	必修選択の別	必
	学習・教育目標：D（◎）	教員名 メールアドレス	山本 義久 yama1215@fish-u.ac.jp		
	履修年次・学期	2年 前期			
質 問 受 付	随時、水産情報館2階、研究室2				
授 業 概 要					
私たちの食生活の現状を把握するとともに、その背景や特徴について学習する。食料品の生産から消費に至るまでのフードシステムの流れを総合的に学ぶとともに、農畜水産物や加工食品など食料全般をとりまく経済現象の分析を通して、日本と世界における食料問題を把握するとともに、魚食の重要性と我が国の食文化継承のための課題を理解する。また、授業を進めるに当たり、本授業をより理解するために最新の水産に関する研究成果や概要を適宜紹介する。					
授 業 の 目 標					
一般目標：我が国における食生活の変遷とその特徴、フードシステムを構成する農水産業、食品流通業、外食・中食産業等の現状や課題を理解するとともに日本と世界における食料問題を理解する。 行動目標：①フードシステムの考え方を説明することができる、②グラフや統計情報から食料をとりまく経済現象を理解し、その社会的・経済的背景を説明できるようになる。					
回	授 業 計 画 ・ 内 容				
1	ガイダンスー本講義の内容と学習のポイントの理解				
2	フードシステムの理解				
3	食生活と環境の変化について学習				
4	食の需給の状況について学習				
5	日本人の魚食の傾向について学習				
6～7	魚食から肉食への変化による健康面の影響の解説				
8	農畜水産物の生産について学習				
9	食品製造業と食品企業、食品加工技術の展開について学習				
10	食品の流通システムと流通技術について学習				
11	食料・食品輸入の状況と食料自給率について学習				
12	日本の食文化とその継承の問題についての学習				
13	世界の食料問題について学習				
14	世界の水問題及び輸入問題についてフードマイレージ等に関連させて学習				
15	食の安全性と資源・環境問題について学習				
キーワード	食料経済、食生活、農水産業、食品流通業、外食・中食産業、食料問題、フードシステム 参考書；世界の農業と食料問題のすべてがわかる本（八木宏典）、食は国家なり！日本の農業を強くする5つのシナリオ（横山和成）、学校給食における食材調達と水産物利用（村上陽子）他				
教科書 参考書					
評価方法 評価基準	評価方法；課題提出物（100％）で評価する。 評価基準；課題提出物によって授業目標についての理解度、達成度を評価する。				
関連科目	水産経済学Ⅰ、水産流通加工ビジネス論、水産物市場構造論、水産物フードシステム実習				
履修要件	特になし				
教 育 方 法 ・ そ の 他					
自作テキスト（配布資料）及びプレゼンテーションを用いた講義を中心とする。関連参考書からの課題を与え提出させるとともに授業の課題の関連情報について学生の理解度を確認しながら授業を進め、適宜、レポートを課し、理解度を評価する。					

学 科 目 名	漁業構造論Ⅰ	単位数	2単位	必修選択の別	必
	The Structure of Japan's Fisheries Industry	教員名 メールアドレス	西村絵美 nisimura@fish-u.ac.jp		
	学習・教育到達目標：D（◎）				
履修年次・学期	2年 前期				
質 問 受 付	随時、水産情報館 2階 研究室 3				
授 業 概 要					
日本の漁業は沿岸・沖合・遠洋の3つの漁業部門に区分され、異なる経営規模の経営体がそれらを構成する重層的な構造になっている。我が国漁業の生産・就業構造と経営的特徴を理解することで、現代の漁業をとりまく問題の発生要因や対応策を考え、今後の日本漁業の展開方向を理解するための基礎的知識を習得する。なお、授業を進めるに当たり、本授業をより理解するために最新の水産に関する研究成果や概要を適宜紹介する。					
授 業 の 目 標					
一般目標：我が国漁業の生産・就業構造と経営的特徴についての基礎知識を習得する。 行動目標：今後の日本漁業のあり方を検討できるようになる。					
回	授 業 計 画 ・ 内 容				
1	ガイダンスー本講義の内容と実施方法を理解する。				
2～3	日本漁業の生産基盤について学習し、我が国漁業と漁村の全体像を理解する。				
4	沿岸漁業の生産構造と漁業生産の動向について学習する。				
5	沿岸漁業の就業構造と沿岸漁家の働き方について学習する。				
6	沿岸漁家の経営について学習する。				
7	沿岸漁業における漁業管理について学習する。				
8	漁村の現状と漁村地域活性化の取組状況について学習する。				
9	沖合・遠洋漁業の生産構造と漁業生産の動向について理解する。				
10～11	沖合・遠洋漁業の就業構造と会社経営型漁業の経営について学習する。				
12	日本の養殖業の特性と生産動向について理解する。				
13～15	養殖業の生産構造と養殖経営について学習する。				
キーワード	沿岸漁業、沖合漁業、遠洋漁業、養殖業、生産構造、就業構造、漁業経営				
教科書 参考書	参考書： 『ポイント整理で学ぶ水産経済』廣吉勝治・佐野雅昭 編著（北斗書房） 『図解 知識ゼロからの現代漁業入門』濱田武士監修（一般社団法人 家の光協会） 『水産白書』（水産庁） 「漁業センサス」、「漁業・養殖業生産統計」（農林水産省）				
評価方法 評価基準	評価方法：期末試験（80％）、課題提出物（20％）で総合的に評価する。 評価基準：期末試験と課題提出物によって授業目標についての理解度・達成度を評価する。				
関連科目	漁業構造論Ⅱ				
履修要件	特になし				
教 育 方 法 ・ そ の 他					
スライドや配布資料を用いて授業を進める。					

学 科 目 名	水産政策史	単位数	2 単位	必修選択の別	必
	History of Fisheries Policy	教員名 メールアドレス 甫喜本 憲 hokimoto@fish-u.ac.jp			
	学習・教育到達目標：D（◎）				
履修年次・学期	2年 前期				
質 問 受 付	随時、三学科共用実験棟 2 F 研究室（211）				
授 業 概 要					
戦後日本の水産政策の基底をなす法的枠組（漁業法、水協法、沿振法等）について学習するとともに、水産業の歴史的変遷とそれに対応した政策手法を学習する。また、現在の水産基本法、基本計画の下での水産業の実像と施策の概要、その問題点やスマート水産業について学習する。なお、授業を進めるに当たり、本授業をより理解するために最新の水産に関する研究成果や概要を適宜紹介する。					
授 業 の 目 標					
一般目標：日本水産業が、黎明期、発達期、低成長期にいかなる課題に直面し、どのような政策的働きかけが行われてきたか、またそれが現在の漁業経営体、流通業者、消費者等の経済活動にどのような影響を及ぼしているかを理解する。 行動目標：現在の水産業が抱える根本的な問題点とその対策に関し、基礎的な知見を持つことができるようになる。					
回	授 業 計 画 ・ 内 容				
1	講義の全体像と学習のポイントについて理解する。				
2	フードシステムの視点と国内の水産物の需給構造について理解する。				
3～4	水産行政の歴史―漁業利用と制度改革―について理解する。				
5～6	水産行政の歴史―漁業の外延的拡大―について理解する。				
7～8	水産行政の歴史―沿振法、特措法、沿構―について理解する。				
9～10	水産行政の歴史―外延政策の転換期、低成長期―について理解する。				
11	水産行政の歴史―水産基本法―について理解する。				
12～14	最近の水産政策の動向やスマート水産業について理解する。				
15	まとめ				
キーワード	水産基本法、外延的拡大、中核的漁家、沿岸漁業等振興法、多面的機能				
教科書 参考書	教科書：水産経済学―政策的接近―（小野征一郎著、成山堂書店、2007） 参考書：水産白書（水産庁編、2022） その他、随時、プリントを使用し、授業時間に配布する。				
評価方法 評価基準	評価方法：定期試験とレポートによる総合評価（定期試験80%＋レポート20%） 評価基準：定期試験、レポートについては、授業目標に関する理解度、達成度を評価する。				
関連科目	水産経済学Ⅰ、水産経済学Ⅱ、食料経済論、水産特論				
履修要件	特にないが、極力配当年次に受講すること。				
教 育 方 法 ・ そ の 他					
必要に応じ、官庁統計等の資料を利用した数量的把握も行い、水産業の具体的な実像に迫る講義を心がける。また、予習・復習のため、課題を与え提出させる。					

学 科 目 名	水産制度論 Institution on Fisheries	単位数	2 単位	必修選択の別	選
	学習・教育到達目標：D（◎）	教員名 メールアドレス 板倉信明（非常勤講師） itakura@fish-u.ac.jp			
	履修年次・学期				
質 問 受 付	授業の前後を基本とするが、必要に応じて教室以外の場所で行うこともある。				
授 業 概 要					
水産業は関連する制度を基盤として成立している。この授業では、これら制度が構築された背景、企図する目標、内容及び当該制度の成立後に漁業がどのように推移してきたのかを理解する。なお、授業を進めるにあたり、本授業をより理解するために最新の水産に関する研究成果や概要を適宜紹介する。					
授 業 の 目 標					
一般目標：我が国の水産政策や漁業管理に関する制度の内容や仕組みについて理解する。 行動目標：漁業政策や漁業管理の動向が説明出来るようになる。					
回	授 業 計 画 ・ 内 容				
1	ガイダンス：授業概要・計画の内容の理解を図ると共に、各自の問題意識の試案を検討する				
2	江戸末期の漁業管理：漁業秩序の動揺を理解する				
3	新政府による漁業制度確立への動き：海面官有化宣言・海面借区制、漁業組合準則を理解する				
4	日本初の漁業法の制定：漁業法(M34)の制定の背景、内容、法的性格を理解する				
5	明治漁業法の改正：法改正(M43)が必要になった背景、内容、影響を理解する				
6	昭和漁業法の成立(その1)：漁業制度改革の背景、実施方法、昭和漁業法の目的を理解する				
7	〃 (その2)：昭和漁業法の内容を理解する				
8	漁業法の改正とその意味：平成の漁業法改正の内容、背景、その意味を理解する				
9	日本漁業の特徴把握：漁業に関する基本事項、日本漁業の特徴を生産構造により理解する				
10	共同漁業権の運用実態：漁業法が定める事項、共同漁業権の運用の実例を理解する				
11	定置・区画漁業権運用実態：H30 漁業法改正後定置及び区画漁業権の運用の実例を理解する				
12	許可漁業の運用実態：大臣許可を中心に許可の種類、許可漁業の経済的位置、及び改正漁業法について理解する				
13	戦後の日本漁業の展開(その1)：1945～1970 年代前半期までの動向を理解する				
14	〃 (その2)：1970 年後半期～現代までの動向を理解する				
15	まとめ：授業の総括を行う。				
キーワード	漁業権、共同漁業権、定置漁業権、区画漁業権、許可、展開過程				
教科書 参考書	必要に応じて講義中に指示する。				
評価方法 評価基準	評価方法は、期末試験評点(60%)、課題提出物と小テスト(40%)で総合的に評価する。 評価基準は、試験、提出物の評価基準は、授業内容の理解度、達成度とする。				
関連科目	漁業構造論Ⅰ・Ⅱ（漁業の現状及び抱える問題点などを理解するのに役立つ）				
履修要件	水産業が成立する仕組みや抱える問題点の要因などについて、関心を持つ問題意識を持っておくことが望ましい。				
教 育 方 法 ・ そ の 他					
・ 毎回の授業終了後、短時間の小レポート（200字程度）を課し、各事項の理解を図る。 ・ 小テストを必要に応じて1～2回程度実施して、問題意識の基盤形成や課題の理解を図る。 ・ 問合や相談はメールも受付はするが、出来るだけ対面で行うように受講生には期待したい。					

学 科 目 名	水産物市場構造論	単位数	2 単位	必修選択の別	必
	Marine Products Market Structure	教員名 メールアドレス	刀禰 一幸 k-tone@fish-u.ac.jp		
	学習・教育到達目標：D（◎）				
履修年次・学期	2 年 前期				
質 問 受 付	講義中及び休憩時間中の時間、水産情報館2階 研究室4号室				
授 業 概 要					
水産物流通の仕組み、水揚げから消費までの過程とその関連業務の内容について学び、水産業の現状を理解する。具体的には、産地市場、物流、加工、貿易、消費地市場、水産物消費の動向、資金の流れ、行政や業界団体等の対応についても学び、これからの日本の水産物流通や水産物消費のあり方について検討していく。なお、授業を進めるに当たり、本授業をより理解するために最新の水産に関する研究成果や概要を適宜紹介する。					
授 業 の 目 標					
一般目標：一般商品との市場・流通構造の相違を把握し、日本の水産資源の状況や漁業の状況の特性をふまえ、定量分析（数値化された情報の分析）と定性分析（数値化されていない情報の分析）を用いて、現在の水産物市場構造の特徴を理解する。 行動目標：科学的な論理に基づいて、水産物の市場構造の特徴と課題を理解し、今後の水産物の市場構造のあり方を検討できるようになる。					
回	授 業 計 画 ・ 内 容				
1	ガイダンス、本講義の全体像と学習のポイントを把握する。				
2～3	産地市場の仕組みと機能、現状と課題について学ぶ。				
4	水産物流通過程における物流の仕組み、スマート水産業の取組みについて学ぶ。				
5～6	産地から消費地における水産物加工の仕組みと機能、現状と課題について学ぶ。				
7～8	輸出・輸入等の貿易の仕組み、現状と課題について学ぶ。				
9～10	消費地市場の仕組みと機能、市場外流通の特徴、現状と課題について学ぶ。				
11～12	水産物消費、例えば量販店やコンビニにおける水産物販売の特徴や実態について学ぶ。				
13	水産物流通過程における資金の流れ、現状と課題について学ぶ。				
14	水産物流通における行政や業界団体等の対応と機能について学ぶ。				
15	まとめ				
キーワード	水産物流通、物流、関連産業				
教科書 参考書	教科書：授業に応じ適宜プリントを配布する 参考書：『ポイント整理で学ぶ水産経済』廣吉勝治・佐野雅昭著（北斗書房）				
評価方法 評価基準	評価方法；期末試験（70％）、小テスト（30％）で総合的に評価する。 評価基準；期末試験および小テストによって授業目標についての理解度・達成度の確認を行う。				
関連科目	食料経済論、水産統計データ解析、水産物ロジスティック・システム論、 水産流通加工ビジネス論、水産経営分析論				
履修要件	特になし				
教 育 方 法 ・ そ の 他					
PPTのスライド等を利用してしながらビジュアルに講義を進めていく。					

学 科 目 名	水産労働論	単位数	2単位	必修選択の別	必
	Labor economics of fisheries	教員名 メールアドレス	大谷 誠 mohtani@fish-u.ac.jp		
	学習・教育目標：D（◎）				
履修年次・学期	2年 後期				
質 問 受 付	随時、水産情報館2階研究室1				
授 業 概 要					
水産業を担う人材について、属性別に就業構造や労働・生活環境、社会的産業的役割を学ぶことで、人材を有効に活用するために必要な確保育成方法や環境整備のあり方を理解する。なお、授業を進めるに当たり、本授業をより理解するために最新の水産に関する研究成果や概要を適宜紹介する					
授 業 の 目 標					
一般目標：漁業後継者の確保育成や高齢漁業者の有効活用、漁村女性の社会進出、外国人労働力の利活用などに必要な知見を獲得し、水産業の人的資源の強化に資することができるようになる。 行動目標：①水産業の就業動向を分析できる。②水産業で働く人々の特性を属性別に説明できる。③水産業の担い手の確保策を説明できる。④水産業や漁村における労働・生活環境の整備方策を説明できる。					
回	授 業 計 画 ・ 内 容				
1	ガイダンス/本講義の内容と実施方法を把握する				
2～3	水産業における就業動向の全体的傾向を理解する				
4～5	漁家子弟（新規学卒）の就業構造や労働・生活環境、確保育成方法を理解する				
6～7	漁家子弟（Uターン）の就業構造や労働・生活環境、確保育成方法を理解する				
8～9	Iターン者の就業構造と労働・生活環境、確保育成方法を理解する				
10～11	高齢漁業者の就業構造と労働・生活環境、有効活用方法を理解する				
12～13	漁村女性の産業的役割と起業化の取組、有効活用方法を理解する				
14	労働力不足に対応した外国人労働力やスマート水産業の利用の現状を理解する				
15	まとめ/講義内容の理解度を確認する				
キーワード	労働経済学、就業構造、労働環境				
教科書 参考書	必要に応じてプリントを使用し、毎授業時間に配布する				
評価方法 評価基準	評価方法：中間テスト（50％）と期末テスト評点（50％）で総合的に評価する 評価基準：テスト、レポートについては、授業目標に対する理解度、達成度を評価する				
関連科目	水産人材育成論				
履修要件	特になし				
教 育 方 法 ・ そ の 他					
学生間や教員とのディスカッション機会を設けながら授業をすすめる。					

学 科 目 名	漁業協同組合論	単位数	2単位	必修選択の別	必
	Fisheries Cooperative Associations	教員名 メールアドレス	甫喜本 憲 hokimoto@fish-u.ac.jp		
	学習・教育到達目標：D				
履修年次・学期	2年 後期				
質 問 受 付	随時、三学科共用実験棟 2 F 研究室（211）				
授 業 概 要					
地域水産業の核となる地区漁業協同組合を中心に、組織の原理、担っている機能、法制度上の位置づけ、経済事業の特徴、経営問題などの基礎知識を学習する。また、歴史的な推移の中で、水産業協同組合がどのように水産業の発展に貢献し、また今日どのような課題があるかやスマート水産業の可能性を学習する。なお、授業を進めるに当たり、本授業をより理解するために最新の水産に関する研究成果や概要を適宜紹介する。					
授 業 の 目 標					
一般目標：漁業者にとっての水産業協同組合の役割、及び組織としての内発的論理を理解する。また、国民経済面から見た水産業協同組合の果たすべき役割を理解する。 行動目標：地域水産業を運営する上で必要な社会的共通資本としての協同組合の意義を理解し、説明できるようになる。					
回	授 業 計 画 ・ 内 容				
1 2～3 4～5 6 7～11 12 13 14 15	講義の全体像と学習のポイントについて理解する。 水産業協同組合の基礎知識について理解する。 水産業協同組合と資源管理の関係について理解する。 小テスト 水産業協同組合の販売事業や営漁指導について理解する。 水産業協同組合と浜プランについて理解する 水産業協同組合の信用事業・共済事業について理解する。 水産業協同組合の経営問題と組織再編について理解する。 水産政策改革以降の水産業協同組合の方向性について理解する。				
キーワード	漁業協同組合、水産業協同組合法、漁村、業種別漁協、漁業権管理、多面的機能				
教科書 参考書	教科書：授業時間ごとにプリントを作成し、配布する。 参考書：水産白書（水産庁編、農林統計協会、2020） 漁協経営論講話（山本辰義著、北斗書房、1996）				
評価方法 評価基準	レポートと小テストによる総合評価（レポート80%＋小テスト20%） レポート、小テストについては、授業目標についての理解度、達成度を評価する。				
関連科目	水産経済学Ⅰ、水産政策史				
履修要件	特になし				
教 育 方 法 ・ そ の 他					
必要に応じ、官庁統計等の資料を利用した数量的把握も行い、水産業の具体的な実像に迫る講義を心がける。また、予習、復習のため、適宜課題を与え、提出させる。					

学 科 目 名	水産物消費マーケティング論 Fish Consumption and Marketing	単位数	2 単位	必修選択の別	選
	学習・教育目標：D（◎）	教員名	田村剛		
		メールアドレス	g-tamura@fish-u.ac.jp		
履修年次・学期	2年後期				
質問受付	授業の前後、三学科共用実験棟教員研究室216				
授 業 概 要					
マーケティングの基本概念について学習する。具体的には、STP（セグメンテーション、ターゲティング、ポジショニング）について学んだ上で、マーケティング活動の基本的な要素である4P（製品政策、価格政策、流通政策、プロモーション政策）について理解し、食品や水産業に適用しさらに理解を深める。					
授 業 の 目 標					
一般目標：①マーケティング活動の第一歩であるセグメンテーション・ターゲティング・ポジショニング（STP）について理解する。②需要曲線と供給曲線から市場メカニズムについて理解する。 行動目標：①マーケティング活動の基本的な要素の4Pについて、それぞれの内容を説明できる。②4Pを水産業に適用し、現在、水産業が直面する課題などを踏まえながら、どのようなマーケティング政策が考えられるかを説明できる。					
	授 業 計 画 ・ 内 容				
1	オリエンテーション～講義内容の概要・評価方法とマーケティングとは何か				
2	付加価値の考え方と計算				
3	マーケティング・マネジメント				
4～5	製品や商品のマネジメント：製品や商品の性質と差別化				
6～7	価格のマネジメント：市場メカニズムと需要の価格弾力性				
8～9	チャンネルのマネジメント：農産物流通と水産物の流通の仕組み				
10～11	プロモーションのマネジメント：コミュニケーション・広告・パブリシティ・人的販売等				
12	食品マーケティングの事例研究：4Pを取り入れた事例分析				
13～14	水産物のマーケティング事例研究：事例紹介と4Pの視点からの評価				
15	まとめ：水産物の付加価値を高めていくためにマーケティングに求められること				
キーワード	付加価値、マーケティング・マネジメント、4P（製品・価格・流通・プロモーション）				
教科書 参考書	教科書を使用せず、適宜必要な資料は講義中に配布する。参考書は以下の通り。 ①石井淳蔵・廣田章光編著『1からのマーケティング』発行所：碩学舎、発売元：中央経済社、2016年。 ②石井淳蔵・栗本契・嶋口充輝・余田拓郎『ゼミナール マーケティング入門』日本経済新聞出版社、2020年。				
評価方法 評価基準	評価方法：期末レポート（70%）、小テスト（30%）で総合的に評価する。 評価基準：授業内容の理解度・達成度とし、特に期末レポートでは論理性も加味する。				
関連科目	食料経済論、水産物市場構造論、水産流通加工ビジネス論				
履修要件	食料経済論を履修することが望ましい。				
教 育 方 法 ・ そ の 他					
・ 講義ではパワーポイントを用いて内容を説明し、学生がコメントシートに記入する形で進める。 ・ 講義の進捗状況に応じて、事前・事後学習として課題を課すことで理解の向上を図る予定である。 ・ 問合せや相談は、原則的には研究室に入室して行うこと。					

学 科 目 名	水産管理環境論	単位数	2単位	必修選択の別	選
	Management and Environment on Fisheries	教員名 メールアドレス	工藤貴史【非常勤講師】 kudot@kaiyodai.ac.jp		
	学習・教育到達目標：D（◎）				
履修年次・学期	2年 後期				
質 問 受 付	メールで質問を受け付けます。				
授 業 概 要					
自然と社会に制約的な影響を受ける水産業の産業的特質を理解するために、まずは漁場環境と水産資源の自然特性・社会特性に関わる基礎的知識を習得し、次いで実際の事例から漁場環境の変化や水産資源の量的質的变化が地域漁業に及ぼす影響と漁業構造の変容過程について学ぶ。さらに、以上の理解を深めた上で、水産業が維持・発展するための課題についても検討していく。					
授 業 の 目 標					
一般目標：水産業を取り巻く自然と社会、漁場環境・水産資源、漁業・水産業の諸関係を構造的に把握して、水産業の産業的特質と水産業を維持・発展させるための課題について理解する。 行動目標：1) 漁場の社会特性と自然特性について説明することができる、2) 水産資源の社会特性と自然特性について説明することができる、3) 漁業とそれを取り巻く自然・社会との相互連関関係について説明することができる、4) 3) を踏まえて水産業が維持発展するための普遍的課題について説明することができる。					
回	授 業 計 画 ・ 内 容				
1	水産業の産業的特質～水産業を取り巻く自然と社会～（社会-生態系アプローチ）				
2～3	漁場環境と水産資源の一般的性格				
4～6	漁場環境の人為的改変と地域漁業の変容 東京湾を事例に（マハゼとホンビノスガイ）				
7～8	漁場環境の人為的改変と地域漁業の変容 霞ヶ浦を事例に（「中心」と「周辺」）				
9～10	富栄養化/貧栄養化と地域漁業の変容 瀬戸内海を事例に（社会関係資本と持続可能性）				
11～12	レジームシフトによる水産資源の変動と地域水産業の変容 マイワシ資源を事例に				
13～14	新しい海洋利用秩序の形成と漁場利用の展望・課題				
15	まとめ				
キーワード	漁場環境、水産資源、地域漁業、構造変化、自然と社会				
教 科 書 参 考 書	プリントを配布する。参考書や参考となる論文については授業で紹介する。				
評価方法 評価基準	評価方法：レポート評点(100%)で評価する 評価基準：授業目標に対する理解度、達成度を評価する				
関連科目	水産経済学Ⅰ、水産経済学Ⅱ、漁業構造論Ⅰ、漁業構造論Ⅱ				
履修要件	特になし。				
教 育 方 法 ・ そ の 他					
各回の授業の終わりに内容を振り返りながらディスカッションをして、その内容を踏まえながら各自小レポートを提出する。次の回において学生からの小レポートを紹介しつつ復習して理解を深める。					

学 科 目 名	魚類学	単位数	2単位	必修選択の別	選
	An Introduction to Ichthyology	教員名 メールアドレス	竹下直彦 takeshin@fish-u.ac.jp		
	学習・教育到達目標：D（◎）				
履修年次・学期	2年 後期				
質 問 受 付	随時。水産生物飼育研究棟 2F魚類学研究室。メールも可（学籍番号と氏名を必ず記入すること）。				
授 業 概 要					
魚類学の主要分野の基礎として、魚類の歴史と進化、分類、外部・内部形態の構造と機能、生態などを学ぶ。また、水産有用種の生態に関する研究成果を適宜紹介する。					
授 業 の 目 標					
一般目標：地球上に出現した最初の脊椎動物である魚類の進化、3万種に及ぶ適応放散、水中生活者としての適応、回遊を含む棲み場所の特徴、内臓諸器官の構造と機能、成熟と繁殖、初期発育などについて理解を深める。 行動目標：本講義の修了者は、水産資源として重要な魚類に関する基礎知識を修得し、それらを説明できるようになる。					
回	授 業 計 画 ・ 内 容				
	1 魚体各部の名称と測定法を学ぶ。 2 地球の誕生から現在に至る魚類の歴史と進化について理解する。 3～4 分布と回遊について理解を深める。 5 体表の構造と機能について学ぶ。 6 筋肉と骨格の構造と遊泳について理解する。 7 摂餌器官と消化系について学ぶ。 8 鰾の構造と浮力調節機構について理解を深める。 9 呼吸器と循環系および感覚器について理解する。 10 排出と浸透圧調節について学ぶ。 11 化学感覚、視覚、物理的感覚について理解する。 12～13 成熟と繁殖について理解を深める。 14 卵発生と初期発育について理解を深める。 15 社会関係と種間関係について理解する。				
キーワード	水産資源，魚類，分類，形態，機能，生態				
教科書 参考書	教科書：なし 参考書：魚類学（矢部 衛，桑村哲生，都木靖彰編，恒星社厚生閣） 魚類学の百科事典（日本魚類学会編，丸善出版）				
評価方法 評価基準	評価方法：期末試験（80％），レポート(20％)で総合的に判定する。 評価基準：期末試験については、授業目標についての理解度，達成度を評価する。レポートについては、講義内容と配布資料の理解度及び表現力，考察力を評価する。				
関連科目	魚類学実験，魚類行動学，魚類増殖学，増殖生態学				
履修要件	特になし。				
教 育 方 法 ・ そ の 他					
基本的には講義形式であり，パワーポイントを多用する。毎回，講義内容関連のプリントを配付する。期末試験を行うほか，講義内容をより深く理解し，自主学習を促進するために，課題（レポート）を与え，提出させる。講義終了時には毎回小テストを行い，理解度を確認する。					

学 科 目 名	漁村漁港環境アメニティ論	単位数	2 単位	必修選択の別	選
	Amenity at Fishing Port and Fishing Community	教員名 メールアドレス	三木 奈都子 (非)		
	J A B E E 学習・教育目標 : D (◎)		永井 巧 (非)		
	履修年次・学期		福留 慶 (非)		
履修年次・学期	2 年前期 (集中講義)				
質問受付	講義の前後				
授 業 概 要					
本授業では、漁村・漁港の変化をその背景にある水産資源の変動や漁業技術の発展等による社会経済的変化から理解する。また、漁村社会が抱える課題について理解するとともに、最新の漁村や沿岸地域の地域活性化の事例や研究成果を把握して今後を展望する。					
授 業 の 目 標					
一般目標 : 社会情勢の変化が漁村の社会構造に及ぼす影響について論理的に解釈する力を身につけ、現在の漁村・漁港やとりまく社会が抱える課題とその課題解決の方法について理解する。					
行動目標 : 事例研究を通して、社会を客観的に捉え分析することができるようになる。					
授 業 計 画 ・ 内 容					
1	講義全体の内容を理解し、統計や文献を用いて、漁村・漁港の現状と取り巻く環境について理解する。				
2	漁村や漁港、漁村社会の成り立ちを歴史的に把握し、沿岸漁場の管理に関する制度と漁村社会の共同体組織との関係、漁村・漁港の活性化について理解する。				
3	沿岸地域の開発や公害・災害の歴史とそれらが漁業経営や漁村生活に与えた影響について学習するとともに、近年の地球温暖化への対応や海洋生態系保全の動きを把握する。				
4~6	＜漁村・漁港の活性化に向けた水産行政や漁業者等の動きについて学ぶ＞ 地域資源を利活用した 6 次産業化や都市との交流・連携・協働、海業等の事例を取り上げ、水産行政や地域行政等の施策や漁業者・地域住民の取り組みについて理解する。				
7~8	＜漁村・漁港の活性化に関わる近年の課題とそれらへの対応について考察する＞ 近年の漁村社会が抱える課題を理解し、それらへの対応策について考察する。 ＜漁村・漁港の活性化に関わる地域づくりや海洋環境保全の取り組みについて学ぶ＞				
9~12	近年の地域社会や気候の変動下における漁村・漁港での海洋レジャー・体験・交流事業と資源管理・海洋生態系の保全の関係や地域の中間支援組織のあり方などについて、具体的事例から学ぶ。 ＜これからの漁村・漁港の可能性について考察する＞				
13~15	地域主導型の漁村・漁港をめぐる新たな取り組みについて概観し、地域社会の経済やウェルフェア、漁港の活用等に関わる新たな漁村のあり方について、客観的、論理的に考察する。				
キーワード	漁業、漁港、漁村、地域づくり、交流事業				
教科書 参考書	開講時にプリントを配布する。 参考図書・資料についてはその都度紹介する。				
評価方法 評価基準	評価方法 : レポート (50%) とプレゼンテーション (50%) から総合評価する。 評価基準 : レポート及びプレゼンテーションによって、授業目標についての理解度、達成度を評価する。				
関連科目	水産地域振興論、水産経済学				
履修要件	水産経済学を履修することが望ましい。				
教 育 方 法 ・ そ の 他					
対話型講義を心がける。好奇心と探究心を刺激し、受講者が自ら考える姿勢を身に付けられるよう考慮する。講義の内容を記したプリントを配布するとともに、スライド等を用いて理解を補助する。					

学 科 目 名	環境倫理	単位数	2単位	必修選択の別	選
	Environmental Ethics	教員名 メールアドレス	多賀谷誠（非） mkttgy@d.fish-u.ac.jp		
	学習・教育到達目標：A(○)・B(◎)				
履修年次・学期	2年次前期				
質 問 受 付	授業前後の教室				
授 業 概 要					
倫理学（ethics）は人間の行為の善し悪し／正不正の基準を探究する学問です。環境倫理は、第二次大戦後に人類が直面した諸課題に対処するべく確立された応用倫理学の一分野です。 科学技術の進歩に伴って、人類は環境を常に自らに都合の良いように変化させてきましたが、もはや時間的にも空間的にも極めて制御の難しいレベルに至っています。「地球に人が住めなくなる」というのは決して文学的な空想ではなく、そう遠くない将来、人類が解決を余儀なくされる現実的な問題です。ここでの「環境倫理」のアプローチは、局所的な部分ではなく、「自然全体」（地球・宇宙環境、生物多様性）及び「後続世代」の生活の自然条件を考察の対象とすること（「世代間倫理」）です。 本講義では環境倫理の歴史と背景を踏まえつつ、科学技術文明時代における人間の自然とのかかわりについて応用倫理的な観点から原理的・実践的に考察する手掛かりを探ります。					
授 業 の 目 標					
一般目標：環境倫理の成立過程・概要・最新動向について理解する。 行動目標：人間の自然とのかかわりについて原理的・実践的に考察する。					
回	授 業 計 画 ・ 内 容				
1	概要説明（倫理学と環境倫理）				
2	応用課題（1）				
3	地球環境と倫理-環境持続性から社会的公正～存在の在り方へ（1）				
4	地球環境と倫理-環境持続性から社会的公正～存在の在り方へ（2）				
5	自然の生存権（生態系・生物多様性と倫理）（1）				
6	自然の生存権（生態系・生物多様性と倫理）（2）				
7	自然の生存権（生態系・生物多様性と倫理）（3）				
8	世代間倫理（1）				
9	世代間倫理（2）				
10	地球全体主義（1）				
11	地球全体主義（2）				
12	応用課題（2）				
13	風土論（風景、景観と倫理）				
14	応用課題（3）				
15	まとめ				
キーワード	倫理学、公正、地球環境、生態系、生物多様性、持続可能性、自然資源、世代間倫理				
教 科 書 参 考 書	参考書：吉永明弘、寺本剛（編）『環境倫理学』昭和堂、2020年 加藤尚武（編）『環境と倫理』有斐閣アルマ、2005年 丸山徳治（編）『応用倫理学講義 2 環境』岩波書店、2004年 シュレーダー＝フレチェット編『環境の倫理』晃洋書房、1993年				
評価方法 評価基準	評価方法：レポート（70%）、提出されたコメント（30%）で総合的に評価する。 評価基準：レポート、提出されたコメントによって、授業目標についての理解度、達成度を評価する。				
関連科目	哲学、技術者倫理				
履修要件	特になし。				
教 育 方 法 ・ そ の 他					
講義資料を配布します。					

学 科 目 名	解析学 Analysis of Functions of Several Variables	単位数	2 単位	必修選択の別	選
	学習・教育到達目標：C (◎)	教員名 メールアドレス	未定		
	履修年次・学期				
質 問 受 付	随時				
授 業 概 要					
この講義では多変数関数の微分積分学を学ぶ。特に 2 変数関数に重点を置いて、その偏微分、全微分、連鎖律、極値問題を取り扱う。講義では計算方法の紹介だけでなく、これらの幾何学的意味にも触れながら、なるべく直観的に理解できるよう説明を心がける予定である。極値問題の応用として、回帰分析とよばれる離散データを連続データに近似する手法を紹介する。時間が許せば多変数関数の積分を扱う。特に、定義から始めて、類似積分を用いた積分の計算方法を紹介する。					
授 業 の 目 標					
一般目標:多変数の微分の基礎を式の計算と幾何学的直観の両方の観点から学習する。2 変数関数の極値判定法の適用方法を理解する。回帰直線の意味を 2 変数関数の極値の観点から理解する。 行動目標: 2 変数関数の偏微分、全微分可能性、連鎖律を理解して計算できる。具体的な 2 変数関数に対して極値判定法を用いて極値を求めることができる。回帰分析の手法を用いて離散データの 1 次近似を求めることができる。					
回	授 業 計 画 ・ 内 容				
1	1 変数関数の微積分の復習				
2	2 変数関数の連続性				
3～5	2 変数関数の偏微分と全微分				
6～8	2 変数関数の高階偏導関数とテイラー展開				
9～11	2 変数関数の極値問題				
12	極値問題の応用：回帰分析				
13～15	2 変数関数の積分の定義、累次積分				
キーワード	多変数関数、偏微分、全微分、テイラー展開、極値、回帰分析、累次積分				
教科書 参考書	特に指定しない。				
評価方法 評価基準	期末試験(70%)と、レポート・小テスト(30%)による。				
関連科目	線形代数、基礎解析学				
履修要件					
教 育 方 法 ・ そ の 他					

学 科 目 名	水産経済・流通調査	単位数	1 単位	必修選択の別	必
	Field Survey on the Actual Condition of Fisheries	教員名 メールアドレス	大谷 誠	mohtani@fish-u.ac.jp	
	学習・教育到達目標：A（○）、D（○）、G（○）、I（◎）		西村絵美	nisimura@fish-u.ac.jp	
履修年次・学期	2 年 前期		田村 剛	g-tamura@fish-u.ac.jp	
質問受付	実習中及び教員研究室，大谷（水産情報館2階研究室1）、西村（水産情報館2階研究室3）田村（三学科共用実験棟教員研究室216）、橋本（三学科共用実験棟）				
授 業 概 要					
漁業地域を訪問し、水産関係者の講話やヒアリング、施設見学、漁業体験等を行う。また、実習前に事前学習を行い、終了後にレポートを作成する。これらによって水産業の実態に即した考察力を得ることが出来る。					
授 業 の 目 標					
一般目標：漁業生産が継続的に行える仕組み（制度や漁業者の経営状況の把握）や、水産物の流通方法や価格の決まり方、それに漁協、行政機関、研究機関等の機能や役割を理解する。 行動目標：水産関連分野で活動するために必要な知識や経験を得ることで、より具体的な形で水産業や漁業地域が抱える問題やその対応策を考えることが出来るようになる。					
回	授 業 計 画 ・ 内 容				
	実習地での水産関係者の講話やヒアリング、施設見学、漁業体験等を2泊3日程度で行う予定である。調査前には調査地の予備的学習を、調査後は調査レポートの作成演習も行う。夏期休暇中に実施することが多いが、受入地域の事情により変更もありうる。				
キーワード	漁村、漁業経営、産地卸売市場、漁業協同組合、漁協経営				
教科書 参考書	必要に応じて指示する。				
評価方法 評価基準	評価方法：レポート（80％）と調査活動態度（20％）で総合評価する。 評価基準：授業目標についての理解度と達成度を総合的に評価する。				
関連科目	水産経済学Ⅰ、水産経済学Ⅱ、水産経営学、水産フィールド調査演習				
履修要件	特になし				
教 育 方 法 ・ そ の 他					
・ 実習地だけでなく、他地域、あるいは水産業全体に共通する課題や問題点を見出そうとする問題意識を期待する。 ・ 実習地においてルールやマナーを厳守すること。					

学 科 目 名	海洋水産実習	単位数	1 単位	必修選択の別	必
	Practical Work in Fishery and Oceanographic Observation	教員名 メールアドレス	水産流通経営学科担任 青木邦匡 aoki@fish-u.ac.jp		
	学習・教育到達目標： A (○)・D (○)・E (○)・G (○) ・H (◎)・I (○)				
履修年次・学期	2 年 前期				
質問受付	随時、担任または講座主任教員の研究室				
授 業 概 要					
練習船においてトロール操業やイカ釣などの漁業操業や海洋観測、漁獲物の取り扱いを実際に体験すると同時に、船内生活や船の運航に関することを体験する。また、水産地区に寄港する場合は水産物卸売市場や試験・研究機関など水産関連の施設や機関の見学等を行い、水産業における生産から流通・消費の実態を体験的に学ぶ。					
授 業 の 目 標					
一般目標：洋上での漁業操業と漁獲物の取扱の体験、寄港する場合は寄港地での水産関連の施設見学を通じて、水産業における生産から流通・消費の実態を理解する。また、練習船の役割を総合的に学ぶとともに、規律正しい船内での共同生活を通して協調性や社会性を持った生活習慣を身に付ける。 行動目標：①適切な水揚げ作業と漁獲物の取扱を行うことができる。②船上団体生活における基本的な生活態度を身に付ける。					
回	授 業 計 画 ・ 内 容				
	・ 洋上で、船長・機関長等から漁船や海洋についての講義を聴き、海や漁船を理解する。 ・ トロールやイカ釣等の漁業操業と漁獲物の取扱の体験をし、漁業生産の実際を理解する。 ・ 洋上での海洋観測を体験し、海洋について理解する。 ・ ブリッジで操船やエンジンルームで機関管理を体験し、漁船の運航を理解する。 ・ 寄港地で水産物卸売市場や水産の試験・研究機関等を見学し、漁業の生産から流通にわたる幅広い水産業の実際を理解する。（実習中に寄港する予定が組み込まれた場合） ・ 実習の反省・まとめを行うとともに、レポートを作成し、提出する。				
キーワード	練習船、トロール操業、海洋観測、水産物卸売市場、水産物流通、共同生活				
教科書 参考書	練習船の教員によるテキスト・資料、引率担任による資料				
評価方法 評価基準	評価方法：レポート評点(100%)で評価する。 評価基準：授業目標についての理解度、達成度を基準に評価する。				
関連科目	水産物フードシステム実習、水産経済・流通調査、水産物市場構造論				
履修要件	船内では練習船教員と乗組員の指導に従うこと。説明会を事前に実施するので、開催通知に注意し必ず出席すること。				
教 育 方 法 ・ そ の 他					
洋上で共同生活を体験するだけでなく、操業や観測など危険な作業にも従事することから、指導者の指示に的確に従い、災害等に遭遇しないように万全の注意を払うこと。					

学 科 目 名	水産人材育成論	単位数	2単位	必修選択の別	必
	Career Design	教員名 メールアドレス	大谷 誠 mohtani@fish-u.ac.jp 西村絵美 nisimura@fish-u.ac.jp		
	学習・教育目標：D（◎）				
履修年次・学期	3年 前期				
質 問 受 付	随時、水産情報館2階研究室1				
授 業 概 要					
キャリア教育に対応した科目である。履修学生が自らのキャリアを形成するために必要な、水産系企業に関する知識を習得するため、業種別に業務内容や労働環境、人事教育制度などの特徴を体系的に学習する。さらに、個別企業の特徴を把握するために必要な企業研究の方法を学習する。そして、職業観や勤労意識を醸成することでキャリアデザイン能力（進路、職業、生き方の選択能力）を身につける。なお、授業を進めるに当たり、本授業をより理解するために最新の水産に関する研究成果や概要を適宜紹介する					
授 業 の 目 標					
一般目標:職業に関する知識を身につけるとともに自己の職業観を育むことで水産人としてのキャリアデザインを主体的に行えるようになる。					
行動目標:①水産系企業について業種別の特徴を説明できる。②個別企業について企業研究をおこなうことができる。③職業観や勤労意識を備える人材となる。④キャリアデザインを描くことができる。					
回	授 業 計 画 ・ 内 容				
1	キャリアデザインの概要と必要性を理解する				
2～3	自らの職業観や勤労意識を確認し自己探索能力を養う				
4～5	水産系企業の特徴を業種別に理解する				
6～7	個別企業の企業研究の方法を理解する				
8～9	企業訪問（企業見学、OBOG訪問、インターンシップ等）の実施方法を理解する				
10～12	企業訪問等の準備及び実践を通して企業研究を演習し実践的なスキルを養う				
13～14	企業の労働環境と自己の職業観とのマッチングを図りキャリアデザインを体験する				
15	まとめ				
キーワード	キャリアデザイン、企業研究、職業観				
教科書 参考書	必要に応じてプリントを使用し、毎授業時間に配布する				
評価方法 評価基準	評価方法：中間レポート評点（30％）、期末レポート評点（70％）で評価する 評価基準：レポートについては授業目標に対する理解度、達成度を評価する				
関連科目	インターンシップ				
履修要件	必ず配当年次に受講すること				
教 育 方 法 ・ そ の 他					
学生が就職活動を見据えて主体的に取り組めるよう心がける。					

学 科 目 名	水産資源経営管理論	単位数	2単位	必修選択の別	必
	Business Management of the Fishing Resources	教員名 メールアドレス	西村絵美 nisimura@fish-u.ac.jp		
	学習・教育到達目標：D（◎）				
履修年次・学期	3年 後期				
質 問 受 付	随時、水産情報館 2 階 研究室 3				
授 業 概 要					
我が国の沿岸域では、これまで公的な漁業管理制度の下で、地元の漁業者グループが秩序を保って資源や漁場を集团的に利用してきた。日本の漁業者集団による水産資源の利用や自主的管理の意義とその実態について、漁業経営と資源利用の関係に着目しながら学習する。なお、授業を進めるに当たり、本授業をより理解するために最新の水産に関する研究成果や概要を適宜紹介する。					
授 業 の 目 標					
一般目標：我が国における公的な漁業管理制度（漁業権制度、漁業許可制度、TAC制度、TAE制度等）と、漁業者集団による水産資源・漁場の自主的管理の展開及びその意義について、諸外国の資源管理制度（TAC、IQ、ITQ）とも比較しながら体系的に理解する。 行動目標：日本の漁業管理の現状と課題が説明でき、持続可能な漁業のあり方について検討できるようになる。					
授 業 計 画 ・ 内 容					
	1 ガイダンスー本講義の内容と実施方法を理解する。 2 水産資源・漁業の特性、資源管理の必要性、「資源管理」と「漁業管理」を理解する。 3 資源管理の手法（投入量規制、技術的規制、産出量規制）と基本モデル（MSY、MEY理論）について学習し、水産資源管理の実践における基礎知識を修得する。 4～6 我が国の公的な漁業管理制度の展開過程と、その下での漁業者集団による水産資源や漁場の自主的管理の実践について学習する。 7～8 我が国における「資源管理型漁業」の発達とその意義について学習する。 9～10 地域漁業の持続性を高めるために漁業者集団が実践している漁業管理の実例を学習する。 11～12 資源回復計画とTAE制度、資源管理指針・資源管理計画体制について学習する。 13～15 日本のTAC制度の特徴、TAC管理の現状や課題、ICT等の活用によるスマート化の展開について、諸外国の資源管理制度（IQ、ITQ）と比較しながら学習する。				
キーワード	資源管理、漁業管理、MSY、MEY、資源管理型漁業、資源回復計画、TAE、TAC、IQ、ITQ				
教科書 参考書	参考書： 『漁業管理のABC—TAC制がよくわかる本—』桜本和美著（成山堂書店） 『長谷川彰著作集第1巻 漁業管理』小野征一郎責任編集・多屋勝雄編（成山堂書店） 『ポイント整理で学ぶ水産経済』廣吉勝治・佐野雅昭編著（北斗書房） 『水産白書』（農林水産省）				
評価方法 評価基準	評価方法：期末試験（80％）、課題提出物（20％）で総合的に評価する。 評価基準：期末試験と課題提出物によって授業目標についての理解度・達成度を評価する。				
関連科目	漁業構造論Ⅰ				
履修要件	特になし				
教 育 方 法 ・ そ の 他					
スライドや配布資料を用いて授業を進める。					

学 科 目 名	水産フィールド調査演習	単位数	1 単位	必修選択の別	必
	Exercise on Methods of Field Survey related to Fishery	教員名 メールアドレス	甫喜本憲 hokimoto@fish-u.ac.jp 児玉工 jkodama@fish-u.ac.jp 西村絵美 nisimura@fish-u.ac.jp		
	学習・教育目標：D（◎）、E（○）、H（○）、I（○）				
履修年次・学期	3年 前期				
質問受付	随時、水産情報館（西村研究室3）三学科共用実験棟2F（甫喜本211、児玉218）				
授 業 概 要					
卒業論文でフィールド調査を行うにあたり、必要な統計分析、ヒアリング、アンケート調査の技術を学ぶ。また、それを用いて、実際に自ら調査を設計して現場で模擬調査を行い、その結果を取りまとめる。なお、本授業をより理解するために最新の水産に関する研究成果や概要を適宜紹介する。					
授 業 の 目 標					
一般目標：統計分析とフィールドワークに関する知識と方法を蓄積し、実習や卒業研究において水産現場の調査を行う技術を身につける。 行動目標：①水産社会科学におけるフィールドワークの意義を説明できる。②水産統計や調査結果のデータを収集し、分析する方法を身につける。③模擬的な調査の結果を発表することができる。					
回	授 業 計 画 ・ 内 容				
1 2～7 8 9 10～15	フィールド調査の意義を学ぶ。 統計を用いた整理・分析の方法を学ぶ。 アンケート調査の方法を学ぶ。 ヒアリング調査の方法を学ぶ。 演習 ① グループに分かれ、テーマを決める。 ② テーマに即した統計整理、調査方法、調査内容を検討し、情報を収集する。 ③ 現地調査を実施する。 ④ 調査結果の集計、整理を行う。 ⑤ レポートを作成して発表する。				
キーワード	フィールドワーク、水産統計、ヒアリング、データ分析、数量的判断 必要資料は担当教員がその都度配布する。				
教科書 参考書					
評価方法 評価基準	評価方法：課題提出物（60%）、レポート（40%）で総合的に判断する。 評価基準：分析力、論理性、問題意識の観点から評価する。				
関連科目	情報科学、水産物フードシステム実習、漁村漁港環境アメニティ論、水産経済・流通調査				
履修要件	特になし				
教 育 方 法 ・ そ の 他					
水産現場の情報収集に必要な情報収集技術とその応用並びに発表までの一連の流れを習得させる。					

学 科 目 名	水産地域振興論	単位数	2単位	必修選択の別	必
	Developing planning of fishing community	教員名 メールアドレス	藤井 陽介 fujii@fish-u.ac.jp		
	学習・教育到達目標：D（◎）				
履修年次・学期	3年 前期				
質 問 受 付	随時(三学科共同研究棟2階 研究室 210)				
授 業 概 要					
全国各地の水産地域における水産資源の利活用や多面的機能に注目した多種多様な地域活性化の取り組み状況を理解する。これらの取り組み事例を知り、水産資源や多面的機能の特性について理解を深めつつ地域活性化を検討するうえでの基礎的見地を理解する。また、授業を進めるに当たり、本授業をより理解するために最新の水産に関する研究成果や概要を適宜紹介する。					
授 業 の 目 標					
一般目標：多様な水産資源を有する地域の今日的状況に対する問題意識を深める。また、スマート水産業の概要や活用事例を通じて、水産振興策についてのメリットとデメリットを理解する。 行動目標：水産統計データなどを参考にし、科学的な論理に基づく水産業を基軸とした地域活性化を実現するための方法論を習得することで、さまざまな問題を抱える実際の現場での論理的解決方法を導き出すことができる。					
回	授 業 計 画 ・ 内 容				
1	講義全体について理解する。				
2～3	我が国行政の意思決定手法と、地域振興の目的と意義について理解する。				
4～5	地域振興施策を立案するための論理的思考について、思考実験を通して理解する。				
6～7	地域資源の利活用による6次産業化、都市漁村交流、スマート水産業の活用事例などの具体施策を取り上げ、水産行政の仕組みと施策について理解する。				
8～9	地域特産のブランド化による効果を成功例と成功要因を理解する。				
10～11	地域特産のブランド化による効果を失敗例と失敗要因を理解する。				
12～14	地域振興のために立案した計画を実行するための方法論として、日程管理、工程管理の概念について理解する。				
15	講義全体の総括をするとともに、実例として地域振興施策の計画案を作成する。				
キーワード	漁村社会、地域振興、水産資源、人的資源、水産統計				
教科書 参考書	授業に応じ適宜プリントを配布する				
評価方法 評価基準	評価方法：期末レポート(85%)、各回の課題(15%)で総合的に評価する。 評価基準：期末試験、レポートによって授業目標についての理解度、達成度を評価する。				
関連科目	水産物市場構造論、漁村漁港環境アメニティ論、水産人材育成論、水産経営学。				
履修要件	極力配当年次の受講が望ましい。				
教 育 方 法 ・ そ の 他					
参加型の授業を行うため、授業に必ず出席し積極的に参加することを望む。					

学 科 目 名	水産国際関係論 Fisheries international relations	単位数	2単位	必修選択の別	必
	学習・教育到達目標：D（◎）	教員名 メールアドレス 児玉工 jkodama@fish-u.ac.jp 大谷誠 mohtani@fish-u.ac.jp 佐々木浩子 sasaki@fish-u.ac.jp			
	履修年次・学期		3年 後期		
質 問 受 付	随時、三学科共用実験棟2階教員研究室（児玉、佐々木）、水産情報館2階(大谷)				
授 業 概 要					
今日、欧米諸国における健康志向の高まり、新興国における経済発展等を背景に、水産物の需要が世界的に増大している。その一方で、水産資源の利用において国家間の競合は精鋭化するとともに、資本、技術、労働力や水産物の国を跨ぐ移動は活発化している。このように様々な側面において水産業のグローバル化が進展する中であって、本授業では日本を中心とした水産に係る国際関係とその国内水産業への影響について学習する。また、前記を踏まえ、水産分野の国際関係のあり方について考える。なお、授業を進めるに当たり、本授業をより理解するために最新の水産に関する研究成果や概要を適宜紹介する。					
授 業 の 目 標					
一般目標：日本の水産業をグローバルな視点から捉えることができるようになる。 行動目標：日本を中心とした水産に係る国際関係とその国内水産業への影響について理解することにより、水産分野の国際関係のあり方について考察力を高めることができる。					
回	授 業 計 画 ・ 内 容				
1	授業全体のガイダンス、水産物消費、漁業生産、養殖業生産、水産物貿易の世界的な動向について学習する。（児玉）				
2～6	漁業をめぐる国際関係について学習する。（児玉）				
7～12	貿易の基礎的理論と水産物貿易の特徴について学習する。（大谷）				
13～15	水産分野の国際関係・国際交渉について学習する。（佐々木）				
キーワード	グローバル化、漁業協定、入漁、国際協力、水産物貿易、国際法				
教科書 参考書	教科書：適宜プリントを配布する。 参考書：適宜紹介する。				
評価方法 評価基準	評価方法：レポート（100%）でもって総合的に判定する。 評価基準：レポートを基に授業の目標の理解度、達成度を評価する。				
関連科目	水産経済学Ⅰ、水産経済学Ⅱ、国際社会と法、海洋法				
履修要件	なし				
教 育 方 法 ・ そ の 他					
授業はパワーポイントを使用して行い適宜プリントを配布するが、ノートをとることが望ましい。 授業の理解度を把握するため、講義終了時に課題を課すことがある。					

学 科 目 名	HACCP	単位数	1 単位	必修選択の別	必
	HACCP	教員名 メールアドレス	前田俊道 toshima@fish-u.ac.jp		
	学習・教育到達目標：D（◎）				
履修年次・学期	3年 後期				
質 問 受 付	随時 二学科共用実験棟ドア番号101				
授 業 概 要					
水産加工業の健全な発展のために、安全な食品を製造する管理方法のHACCPについて、HACCPの制度化、一般衛生管理そしてHACCP計画の手順やハザード分析について理解し、水産加工食品についてのHACCPを学習する。授業を進めるに当たり、本授業をより理解するために最新の水産に関する研究成果や概要を適宜紹介する。					
授 業 の 目 標					
一般目標：水産食品の安全についての専門技術に関する知識と、それらを問題解決に応用できる能力を養う。 行動目標： ① HACCPの制度化を説明できる。⑥ 管理基準を決定できる。 ② 水産食品の生物的ハザード分析ができる。⑦ CCPのモニタリングシステムを決定できる。 ③ 水産食品の化学的ハザード分析ができる。⑧ 改善措置、妥当性確認、検証の手順を説明できる。 ④ 水産食品の物理的ハザード分析ができる。⑨ 食品衛生の一般原則を説明できる。 ⑤ CCPを決定できる。					
回	授 業 計 画 ・ 内 容				
1	HACCP をめぐる日本の状況を理解する。【HACCP 制度化】				
2	コーデックス委員会を理解する。【コーデックス委員会】				
3	ISO：22000：2018 を理解する。【PDCA サイクル】				
4	HACCP の歴史、用語、7 原則 12 手順を理解する。【GHP】				
5	HACCP チームの編成を学ぶ。【メンバー】				
6	意図する用途と対象消費者の特定と製造工程図を理解する。【フローダイアグラム】				
7	ハザード分析の準備と実施方法を理解する。【生物的・化学的・物理的ハザード】				
8	ハザードリストの作成手順を理解する。【原材料・製造工程由来ハザード】				
9	CCP の決定方法を理解する。【決定判断図】				
10	CL の設定を理解する。【妥当性確認】				
11	重要管理点のモニタリングシステムの設定を理解する。【金属探知機】				
12	改善措置、妥当性確認、検証の手順を理解する。【OL】				
13	文書と記録保管方法を理解する。【SSOP】				
14	コーデックスや日本の食品衛生の一般原則を学ぶ。【食品安全文化】				
15	潜在的ハザードを学ぶ。【ヒスタミン】				
キーワード	HACCP，食品衛生，食中毒・腐敗				
教科書 参考書	教科書：HACCP管理者認定テキスト（2021年改訂版），日本食品保蔵科学会HACCP管理者認定委員会編、豊福肇・春日正行・日佐和夫共著、建帛社。教科書を事前に用意しておくこと。 参考書：HACCPトレーニング・カリキュラム（高鳥直樹著、幸書房）。よくわかるHACCP（厚生省監修，日本食品衛生協会），HACCP：衛生管理計画の作製と実践（厚生省監修，中央法規），わかりやすいHACCP（HACCP研究会編），HACCP危害分析および重要管理点教育訓練カリキュラム（第4版，大日本水産会）				
評価方法 評価基準	評価方法：期末試験（85％）と小テスト（15％）で総合的に判定する。 評価基準：期末試験は行動目標の達成度で評価する。小テストは、毎授業前に前回の授業内容について問う。				
関連科目	食料経済論，水産物市場構造論，水産物消費マーケティング論，水産流通加工ビジネス論				
履修要件	特になし。				
教 育 方 法 ・ そ の 他					
毎回の予習キーワードを上記授業計画の【 】内に提示するのでこれに関して予習を行い、毎回簡単な予習レポートを提出すること。この提出をもって出席とする。また、毎授業前に前回の授業内容についての小テストを行うので復習をしておくこと。					

学 科 目 名	水産特論 Special Lecture about the Fisheries	単位数	2単位	必修選択の別	必
	学習・教育到達目標：A（◎）・D（○）	教員名 メールアドレス	甫喜本憲 hokimoto@fish-u.ac.jp （水産流通経営学科） 学外講師 （行政、研究機関の職員）		
	履修年次・学期	3年 通年			
質 問 受 付	随時 三学科共用実験棟 2階甫喜本研究室（211）				
授 業 概 要					
1年をかけて、水産業にかかわる国や全国組織の機関で要職にある担当者から政策、研究面における最新の取組等について講義を受け、現在の水産業の課題と政策、問題解決のための考え方や専門的な技術について学ぶ。この講義によって、水産業の役割、課題、その対応策などの全体像を捉え、主体的に課題解決へ取り組むための問題意識及び対応策の検討ができる力を養うことができる。 また講義ではスマート水産業に関連した内容を適宜盛り込み、理解を深める。					
授 業 の 目 標					
一般目標：水産業の現状を論理的・総合的に把握できる視野を養い、実際の水産業の課題と政策、問題解決のための考え方と技術について理解する。 行動目標：①広い視野から水産業界に対する理解を深める。②現実的な水産業の課題と対応策を考察できるようになる。③水産行政と水産研究、水産教育の関係を理解することができる。					
回	授 業 計 画 ・ 内 容				
1	水産特論で学ぶ内容とその目的を理解する（ガイダンス）。				
2～14	水産行政に直接携わっている行政官から、最新の国内外の漁業・養殖業と水産資源の状況、経営問題や水産物流通、これらに係る国内外の議論、課題と施策等に関して学ぶ。また、水産研究・教育機構研究開発職員から、現在の水産業の課題とそれを解決するべく研究の考え方や技術等について学ぶ。				
15	上記の講義を踏まえ水産研究の体制と方向等について学ぶとともに、水産行政と水産研究、水産教育の関係を理解する。				
キーワード	水産行政、水産研究、水産資源、漁業・養殖技術、水産物流通、水産教育				
教科書 参考書	教科書：プリントを配布する。 参考書：「水産白書」水産庁編(農林統計協会)				
評価方法 評価基準	評価方法：講義ごとに提出されたレポートから総合的に判定する（100％）。 評価基準：いずれも評価の基準は、授業目標への理解度、達成度である。				
関連科目	水産業の現状や課題、水産行政施策が講義内容となるため、水産大学校の全学科において開講している専門科目の多くが関連する。				
履修要件	特になし				
教 育 方 法 ・ そ の 他					
3年生全員の必修科目となっており、4年次直ぐに行われる公務員試験等の対策科目として位置づけられる。通年科目であり、講師の都合により講義日が流動的であるため、MASISでの開講日の案内に注意すること。					

学 科 目 名	養殖経済論	単位数	2単位	必修選択の別	必
	Economics of aquaculture	教員名 メールアドレス	橋本 博 hhashimoto@fish-u.ac.jp		
	学習・教育到達目標： D (◎)				
履修年次・学期	3年前期				
質 問 受 付	随時，授業の前後も受け付ける				
授 業 概 要					
日本の国策として，令和2年に「養殖業成長産業化総合戦略（以下，総合戦略）」が策定された。総合戦略では今後10年間でブリ類，マダイ，クロマグロ，サケ・マス類，ハタ類，ホタテガイ，真珠（以上，養殖業戦略品目）の生産量及び輸出货量を増大させることを目標としている。本授業では養殖業戦略品目を中心に，魚種毎の養殖生産から経営・流通形態まで学習する。また，授業を進めるにあたり，本授業をより理解するために最新の水産に関する研究成果や概要を適宜紹介する。					
授 業 の 目 標					
一般目標：1．養殖業戦略品目の魚種を中心として，親魚養成・種苗生産・養殖・流通の各工程を理解する。 2．養殖業戦略品目における産業としての問題点と展望を，生産から消費にわたり幅広く理解する。 3．国策である養殖業成長産業化総合戦略を理解するために必要な知識を身につける。 行動目標：戦略品目における養殖・流通の現実を理解し，客観的で正確な認識を持てるようになる。					
回	授 業 計 画 ・ 内 容				
1	ガイダンス：養殖業成長産業化総合戦略の概要を学ぶ。				
2～3	ブリ類のうちブリ養殖業の親魚養成・種苗生産・養殖・流通の各工程を学ぶ。				
4～5	ブリ類のうちカンパチ養殖業の親魚養成・種苗生産・養殖・流通の各工程を学ぶ。				
6～7	クロマグロ養殖業の親魚養成・種苗生産・養殖・流通の各工程を学ぶ。				
8	ハタ類のうちスジアラ養殖業の親魚養成・種苗生産・養殖・流通の各工程を学ぶ。				
9	マダイ養殖業の親魚養成・種苗生産・養殖・流通の各工程を学ぶ。				
10	ヒラメ・トラフグ養殖業の親魚養成・種苗生産・養殖・流通の各工程を学ぶ。				
11	ホタテガイ養殖業の採苗・種苗生産・養殖・流通の各工程を学ぶ。				
12～14	ブリ類・マダイ・クロマグロ養殖業を実施している大手企業の実例から学ぶ～養殖業者の出前授業も含めて，各企業が抱えている問題点，今後の展望を理解する。				
15	海外輸出への戦略を学ぶ～北米・東南アジア向けの最新の輸出状況について理解する。				
キーワード	給餌養殖，魚類養殖，ブリ類，養殖新法，養殖経営				
教科書 参考書	教科書：なし 参考書：水産庁「水産白書」 虫明敬一編著「ブリ類の科学」 中野秀樹編著「マグロの科学」 家戸敬太郎編著「マダイの科学」 尾定 誠「カキ・ホタテガイの科学」				
評価方法 評価基準	評価方法：期末試験（80％），小テスト（10％），レポート（10％）で総合的に判断する。 評価基準：期末試験，レポートについては，授業目標についての理解度，達成度を評価する。				
関連科目	水産経済学，水産経営学，漁業協同組合論，水産物消費マーケティング論				
履修要件	特になし				
教 育 方 法 ・ そ の 他					
講義の内容は養殖業成長産業化総合戦略を理解するため専門性が高く，魚種毎に学習するため複雑で多岐にわたる。理解しやすいようにPPTのスライド等を利用してビジュアルに講義を進めていく。また，養殖業者の出前授業を行い，実際の現場の声を聞き，より学習意欲を刺激する。 将来，養殖関連産業に就職を考えている学生には是非受講していただきたい。					

学 科 目 名	水産経営分析論	単位数	2 単位	必修選択の別	選
	Analysis of Fisheries Business Management	教員名	田村剛		
	学習・教育到達目標：D（◎）	メールアドレス	g-tamura@fish-u.ac.jp		
履修年次・学期	3 年 後期				
質 問 受 付	授業の前後、三学科共用実験棟教員研究室216				
授 業 概 要					
本講義では、財務諸表の中の貸借対照表や損益計算書の見方、その中の経営指標について学習する。その上で、経営指標を用いた安全性分析・収益性・生産性分析の考え方を身につける。さらに損益分岐点分析や線形計画法による分析方法を学習する。最後の方で最新の研究成果や概要を適宜紹介しながら、水産業における財務諸表を読み込んで、安全性分析・収益性・生産性分析を試み、健全な水産物経営に向けての留意点について考察する。					
授 業 の 目 標					
一般目標：貸借対照表や損益計算種、キャッシュフロー表など財務諸表のしくみを理解する。②財務諸表に登場する経営指標やそれを使った経営分析を理解する。					
行動目標：①安全性分析・収益性・生産性分析について説明できる。②損益分岐点分析を用いて、単なる損益分岐点だけでなく、目標金額を達成するために必要な損益分岐点売上高を算出することができる。③水産業の事例で紹介されている損益分岐点分析を説明できる。					
回	授 業 計 画 ・ 内 容				
1	ガイダンス：一講義内容・経営分析とは何か				
2	財務諸表の考え方と役割				
3～4	貸借対照表と損益計算書のしくみ				
5～7	経営分析：安全性・収益性・生産性の分析：考え方と計算演習				
8～9	損益分岐点分析：考え方と計算演習				
10～11	線形計画法の分析：考え方と計算演習				
12	水産物経営の現状：水産物経営における財務諸表				
13～14	水産物経営分析：安全性・収益性・生産性分析				
15	まとめ：経営分析の視点から継続的な利益を確保するために必要なこと				
キーワード	財務諸表、安全性・収益性・生産性分析、損益分岐点分析、線形計画法				
教科書 参考書	教科書を使用せず、適宜必要な資料は講義中に配布する。参考書は以下の通り。 ①佐伯良隆『決算書「分析」超入門 2020』朝日新聞出版、2019。 ②有価証券報告書（大手水産会社等のもの）				
評価方法 評価基準	評価方法：期末レポート（70％）、小テスト（30％）で総合的に評価する。 評価基準：授業内容の理解度・達成度とし、特に期末レポートでは論理性も加味する。				
関連科目	水産経営学				
履修要件	経営学の基礎知識があることが望ましい。				
教 育 方 法 ・ そ の 他					
・ 講義ではパワーポイントを用いて内容を説明し、学生がコメントシートに記入する形で進める。 ・ 講義の進捗状況に応じて、事前・事後学習として課題を課すことで理解の向上を図る予定である。 ・ 問合せや相談は、原則的には研究室に来室して行うこと。					

学 科 目 名	海洋法 International Law of the Sea	単位数	2単位	必修選択の別	選
	学習・教育到達目標：D（◎）	教員名 メールアドレス	佐々木浩子 sasaki@fish-u.ac.jp		
履修年次・学期	3年前期				
質 問 受 付	随時可。三学科共用実験棟 2 階教員研究室（207）。				
授 業 概 要					
四方を海に囲まれた日本はエネルギー資源の輸入のほぼすべてを海上輸送に依存している。また、天然資源の乏しい日本にとって、水産資源を含む海洋資源は経済的な観点から重要である。こうした海洋に関係する活動や事項は国際関係の長い歴史の中で形成されてきた海洋法によって規律されている。本授業では、海洋法とはどのような法であるのかについて、「海の憲法」と称される国連海洋法条約を中心に学ぶ。授業内容を理解しやすいよう、授業では具体的な事例や最新のニュースを適宜取り上げる。なお、授業を進めるに当たり、本授業をより理解するために最新の水産に関する研究成果や概要を適宜紹介する。					
授 業 の 目 標					
一般目標：学生は、海洋法の全体像と存在意義を理解する。海洋に関する様々な課題を把握し、課題に対して海洋法がどのように対応してきたのか・対応しているのかを理解する。 行動目標：学生は、海洋に関する課題への現在の対応ぶりについて、自分なりの問題意識や自分なりの考えを説明できるようになる。					
回	授 業 計 画 ・ 内 容				
1	ガイダンス				
2～3	海洋法の歴史と発展：海洋法がどのように発展してきたのかを学ぶ。				
4～7	国連海洋法条約 1：海洋の法的区分について、範囲（距離）や法的性質などを学ぶ。				
8～9	国連海洋法条約 2：海洋環境の保護・保全についてのルールを学ぶ。				
10	小まとめ				
11～13	漁業と海洋法：漁業の管理枠組み、IUU漁業問題などを学ぶ。				
14	北極海と海洋法：北極海における課題や関連するルールを学ぶ。				
15	最近の動き：海洋や海洋法における新たな動き・論点などを学ぶ。				
キーワード	国連海洋法条約、領海、排他的経済水域、大陸棚、公海、漁業、航行、航行、海洋環境、国連公海漁業実施協定、地域漁業管理機関、海洋生物多様性				
教科書 参考書	教科書：特に指定しない。適宜プリントを配付する。 配付したプリントは毎時間持参することが望ましい（過去に配付したプリントを参照することがある）。 参考書：大森正仁ほか『入門 国際法』（法律文化社、2024年） 島田征夫ほか『国際海洋法〔第三版〕』（有信堂高文社、2023年）				
評価方法 評価基準	評価方法：定期試験と小テストによる総合評価（定期試験80%、小テスト20%）。 評価基準：授業の目標の理解度・達成度を評価する。特に次の点から評価を行う。①海洋法の基本事項を理解しているか、②問いに対して直接かつ十分に答えているか、③適切な文章が書けているか、④海洋法のルールや先例等を踏まえて自身の考えを説得的に述べているか。				
関連科目	国際社会と法、水産国際関係論、水産経済学Ⅱ				
教 育 方 法 ・ そ の 他					
授業は基本的に講義形式でパワーポイントを使用して行う。適宜プリントを配付するが、各自ノートをとることが望ましい。授業内容の理解が進むよう、講義中に課題を出すことがある。					

学 科 目 名	水産行政論	単位数	2単位	必修選択の別	選
	System of fisheries administration	教員名 メールアドレス	児玉工 jkodama@fish-u.ac.jp		
	学習・教育到達目標：D（◎）				
履修年次・学期	3年 前期				
質 問 受 付	随時 三学科共用実験棟 2 階教員研究室（部屋番号 218）				
授 業 概 要					
一般論として行政の役割について学習する。続いて、公的統計等を使用して国内水産業の動向と特徴、水産業をめぐる国内的国際的な動きについて学習するとともに、水産施策や水産業に関わる制度の動向と関係する法令について学習する。そのうえで、水産行政のあり方について考える。 なお、授業を進めるに当たり、本授業をより理解するために最新の水産に関する研究成果や概要を適宜紹介する。					
授 業 の 目 標					
一般目標：国内水産業の動向と特徴、水産業をめぐる国内的国際的な動きを踏まえ、日本の水産施策や水産業に関わる制度の動向と関係する法令について理解する。 行動目標：日本の水産施策や水産業に関わる制度の動向に関する知識を得ることにより、水産行政のあり方について考察力を高めることができる。					
回	授 業 計 画 ・ 内 容				
1	授業全体のガイダンス				
2	一般論として行政の役割について学習する。				
3、4	漁業制度とその背後にある考え方、漁業制度改革について学習する。				
5、6	資源管理施策とその背後にある考え方について学習する。				
7、8	漁業経営の特徴と経営支援施策について学習する。				
9、10	卸売市場制度とその背後にある考え方、卸売市場制度改革について学習する。				
11	魚価対策・流通加工消費対策に関する施策について学習する。				
12	多面的機能と水産基盤整備について学習する。				
13	漁業における国際関係について学習する。				
14	水産物貿易と関連施策について学習する。				
15	まとめ				
キーワード	漁業制度、資源管理、漁業経営、水産基盤整備、卸売市場制度、魚価対策、水産物貿易				
教科書 参考書	教科書：適宜、プリントを配布する。 参考書：「ポイント整理で学ぶ水産経済」（北斗書房） 「水産白書」水産庁編（農林統計協会）				
評価方法 評価基準	評価方法：定期試験（80％）と課題提出物（20％）でもって総合的に判定する。 評価基準：定期試験と課題提出物を基に授業の目標の理解度、達成度を評価する。				
関連科目	水産経済学Ⅱ、水産特論				
履修要件	特になし				
教 育 方 法 ・ そ の 他					
授業はパワーポイントを使用して行い適宜プリントを配布するが、ノートをとることが望ましい。 授業の理解度を把握するため講義終了時に課題を課すことがある。					

学 科 目 名	水産統計データ解析 Elements of Social Data Analysis	単位数	2単位	必修選択の別	選
	学習・教育到達目標：D（◎）	教員名 メールアドレス jkodama@fish-u.ac.jp			
	履修年次・学期				
質 問 受 付	授業中および授業の前後 教室				
授 業 概 要					
水産に関する統計データから有用な情報を引き出す手法について、理論（座学）と実践（演習）により学習する。 なお、授業を進めるにあたり、本授業をより理解するために最新の水産に関する研究成果や概要を適宜紹介する。					
授 業 の 目 標					
一般目標：分析手法の基礎理論と実践方法について理解する。また、分析結果を読み取る力を身につける。 行動目標：所与の目的を達成するため、統計データを分析しその結果に基づいて対象とする事象について考察できるようになる。					
回	授 業 計 画 ・ 内 容				
1	講義の内容と進め方について理解する。				
2～4	変量の特徴や変量間の関係性を分析する手法について理論的に学習する。				
5	小試験				
6～8	変量の特徴や変量間の関係性を分析する手法について実践的に学習する。				
9～11	産業連関分析について理論的に学習する。				
12	小試験				
13～15	産業連関分析について実践的に学習する。				
キーワード	回帰分析、重回帰分析、時系列解析、産業連関分析				
教科書 参考書	教科書：適宜プリントを配布する。 参考書：適宜紹介する。				
評価方法 評価基準	評価方法：小試験（50％）と課題提出物（50％）でもって評価する。 評価基準：小試験と課題提出物を基に授業の目標に対する理解度、達成度を評価する。				
関連科目	情報科学、線形代数、確率統計学				
履修要件	線形代数、確率統計学の単位を取得していることが望ましい				
教 育 方 法 ・ そ の 他					
授業は、分析手法の基礎理論について学ぶ座学と、実際に各学生がパソコンを用いて分析手法を実践する演習で構成される。座学は講義棟教室にて、演習はマルチメディアネットワークセンター教室にて実施する。					

学 科 目 名	水産流通加工ビジネス論	単位数	2 単位	必修選択の別	選
	Fishing Distribution and Processing Business	教員名	刀禰 一幸		
	学習・教育到達目標：D（◎）	メールアドレス	k-tone@fish-u.ac.jp		
履修年次・学期	3 年 後期				
質 問 受 付	授業中及び休み中の時間、水産情報館2階 研究室4号室				
授 業 概 要					
水産物流通の全体像を基礎に、加工品毎の内容と水産加工業ビジネスの現状について実学的に理解する。具体的には、水産物流通の構成者、お金の流れ、加工品の種類や特徴、各加工品のビジネス展開について学び、これからの水産物加工品ビジネスのあり方について検討していく。また、受講者各自による水産加工品のマーケットリサーチを行い、その内容についてプレゼンテーションを行う。なお、授業を進めるに当たり、本授業をより理解するために最新の水産に関する研究成果や概要を適宜紹介する。					
授 業 の 目 標					
一般目標：水産物流通の構成者、お金の流れ、加工品の種類や特徴、各加工品のビジネス展開について理解する。ビジネスを意識したプレゼンテーション技術を身につける。 行動目標：水産物流通及び水産加工品のビジネスの特徴と課題を理解し、今後の水産加工業ビジネスのあり方を検討できるようになる。プレゼンテーションを行うことができるようになる。					
回	授 業 計 画 ・ 内 容				
1	ガイダンス、本講義の全体像と学習のポイントを把握する。				
2	水産物市場構造の全体像について学ぶ。				
3	水産加工品の種類と特徴について学ぶ。				
4	水産加工業における「歩留り」と「衛生管理」について学ぶ。				
5～7	水産加工品の消費の現状やスマート水産業の取組みについて学ぶ。				
8～9	ビジネスにおける「お金の流れ」について学ぶ。				
10	プレゼンテーションの手法について学ぶ。				
11～14	水産加工品のプレゼンテーションを体験する。				
15	まとめ				
キーワード	水産加工業、与信管理、マーケティング、マーケットリサーチ				
教科書 参考書	必要に応じてプリント教材などを配布する。				
評価方法 評価基準	評価方法；期末試験（70％）、プレゼンテーション（30％）で総合的に評価する。 評価基準；期末試験およびプレゼンテーションによって授業目標についての理解度・達成度の確認を行う。				
関連科目	食料経済論、水産経済学、水産経営分析論、水産物ロジスティクス・システム論、水産物消費マーケティング論、水産物市場構造論				
履修要件	特になし				
教 育 方 法 ・ そ の 他					
PPTのスライド等を利用しながらビジュアルに講義を進めていく。 受講生全員にプレゼンテーションを体験する機会を設ける。					

学 科 目 名	漁業構造論Ⅱ	単位数	2単位	必修選択の別	選
	The Structure of Japan' s Fisheries IndustryⅡ	教員名 メールアドレス	大谷 誠 mohtani@fish-u. ac. jp		
	学習・教育目標：D（◎）				
履修年次・学期	3年 前期				
質 問 受 付	随時、水産情報館2階研究室1				
授 業 概 要					
日本の沿岸域の利用における漁業及び関連産業の関連性、構造変化、制度的産業的問題とその対応のあり方を学ぶ。とくに授業内容と関係する研究論文を輪読することで、漁業構造を捉える能力を養うとともに次年度の卒業論文に取り組むための基礎的な能力も養う。なお、授業を進めるに当たり、本授業をより理解するために最新の水産に関する研究成果や概要を適宜紹介する。					
授 業 の 目 標					
一般目標：日本の沿岸域利用の実態を漁業と関連産業の関係を踏まえて構造的に理解し、実践的な対応のあり方に関する知見を習得することで、日本本漁業の成長産業化に資することができるようになる。 行動目標：沿岸域利用について①実態と制度を説明できる②構造分析ができる③取り巻く環境の変化と発生する問題を説明できる④実践的な問題解決方法を提案できる。					
回	授 業 計 画 ・ 内 容				
1 2～5 6～9 10～14 15	ガイダンス/本講義の内容と実施方法を把握する 海洋性レクリエーションによる沿岸域の利用実態と制度を理解し、研究論文を輪読する 漁業による沿岸域の利用実態と制度、関連産業との関係性を理解し、研究論文を輪読する 沿岸域の総合的利用に関する今日の特徴を理解し、研究論文を輪読する まとめ/講義内容の理解度を確認する				
キーワード	漁業、養殖業、生産構造、就業構造、経営管理、流通機構、販売戦略				
教科書 参考書	教科書：必要に応じてプリントを使用し、毎授業時間に配布する 参考書：漁業経済研究等の水産経済研究分野を扱う学術論文集				
評価方法 評価基準	評価方法：期末テスト評点（80％）、レポート評点（20％）で総合的に評価する 評価基準：テスト、レポートについては授業目標に対する理解度、達成度を評価する				
関連科目	水産経済学Ⅰ、水産経済学Ⅱ、漁業構造論Ⅰ				
履修要件	漁業構造論Ⅰを履修していることが望ましい				
教 育 方 法 ・ そ の 他					
随時、授業内容の理解度を確認する小テストを行い、授業の復習が習慣化するようつとめる。					

学 科 目 名	インターンシップ Internship	単位数	1 単位	必修選択の別	選
	学習・教育到達目標：A（◎）	教員名 メールアドレス	水産流通経営学科長 青木邦匡 aoki@fish-u.ac.jp		
履修年次・学期	3 年 通年				
質問受付	授業中及び随時、3 学科共同実験棟 2 階青木学科長及び担任教員				
授 業 概 要					
中央又は地方公共団体の水産行政機関、水産系統団体、水産関連企業等を受け入れ先とし、受け入れ機関、団体、企業等の業務を体験する。					
授 業 の 目 標					
一般目標：受け入れ先の業務を実地に体験し、社会経験を積むとともに、講義や実習等で得た水産知識や技術を実践的なレベルに高め、自己の就業の適性等についての判断材料を得る。 行動目標：社会人としてのマナーを身につけ、職業人として行動できるようになる。					
回	授 業 計 画 ・ 内 容				
1	研修前の学習 自己分析を行い、志望動機を明らかにする。マナーを学習する。				
2	研修先の決定 適正や志望動機から研修先を決定する。研修先から注意事項の伝達を受ける。				
3	研修の実施 受け入れ先に赴き、業務体験、研修を行う。				
4	研修後の学習 研修終了後に研修の反省とまとめを行うとともに、レポートを作成し提出する。 注：日数は、受け入れ先の事情により変更されることがある。				
キーワード	特になし				
教科書 参考書	特になし				
評価方法 評価基準	評価方法：レポート作成評点(50%)、受け入れ先の評点(50%)で総合評価する。 評価基準：レポートは、授業目標についての理解度と達成度を総合的に評価する。				
関連科目	特になし				
履修要件	受け入れ先に迷惑がかからないよう、あらかじめ学科において適正診断を行う。				
教 育 方 法 ・ そ の 他					
受け入れ先での研修は 1 日 8 時間×5 日＝4 0 時間程度(受け入れ先の都合により、研修日数、時間が変更されることがある。)とし、春季・夏季休業中など講義に影響が少ない時期に実施する。現場での業務に従事するにあたっては、受け入れ先担当の注意を厳守し、事故を起こしたり損害を与えることがないよう真摯に行動すること。					

学 科 目 名	水産物ロジスティック・システム論	単位数	2単位	必修選択の別	選
	Fisheries products logistic system theory	教員名 メールアドレス	藤井 陽介 fujii@fish-u.ac.jp		
	学習・教育到達目標：D（◎）				
履修年次・学期	3年後期				
質 問 受 付	随時(三学科共同研究棟2階 研究室 210)				
授 業 概 要					
水産物は、私たちの生活に欠かすことのできない食品である。グローバル化する現代社会においては水産物の輸送距離が長くなり、ロジスティクスがますます重要となっている。ロジスティクスとは、調達から販売に至る一連のプロセスの全体最適化を図ることで、近年、経営戦略の一環として、注目されている。この講義では、はじめに水産物流通の基礎とその役割について学ぶ。次に、水産物のロジスティクスの仕組みと特徴、実際について学習する。なお、授業を進めるに当たりスマート水産業の概要と活用事例を適宜紹介する。					
授 業 の 目 標					
一般目標 ①水産物流通の機能と役割を学ぶ。 ②ロジスティクスの基礎について理解する。 行動目標 ① 物流とロジスティクスの違いを説明できるようになる。 ② 企業経営におけるロジスティクスの役割と重要性について説明できるようになる。 ③ 水産物のロジスティクス・システムの特徴について、説明できるようになる。					
回	授 業 計 画 ・ 内 容				
1	ガイダンス。				
2-3	水産物の流通の基礎について理解する				
4-5	水産物流通の特性とスマート水産業の活用事例について理解する。				
6-7	水産物における卸売市場の特性とスマート水産業の活用事例について理解する。				
8-9	ロジスティクスの成り立ちと物流の違いについて理解する。				
10-11	ロジスティクスの機能（輸送・保管・荷役・包装・流通加工・情報管理）を学習する				
12-13	輸送手段の特徴について理解する				
14-15	水産物におけるロジスティクスの変遷と現状を学習する。				
キーワード	情報化 ロジスティクス 流通チャネル インフラ整備 物流システム				
教科書 参考書					
評価方法	評価方法：試験（85％）および小課題(15％)で評価する。				
評価基準	評価基準：試験は、授業目標についての理解度、達成度を評価する。				
関連科目	特になし				
履修要件	特になし				
教 育 方 法 ・ そ の 他					
参加型の授業を行うため、授業に必ず出席し積極的に参加することを望む。					

学 科 目 名	卒業論文 Graduation Thesis	単位数	6 単位	必修選択の別	必
	学習・教育到達目標：A（◎）・B（◎）・C（◎）・D（◎）・E（◎）・F（◎）・G（◎）・H（◎）・I（◎）	教員名 メールアドレス	水産流通経営学科教員 流通経営講座主任 甫喜本憲 hokimoto@fish-u.ac.jp		
履修年次・学期	4 年 通年				
質問受付	担当教官の指定する時間、担当教員の研究室				
授 業 概 要					
本校における学習の集大成として、学生が研究課題を選択し指導教員の指導を受けながら研究計画の立案、研究の実施、研究成果の取りまとめを行って卒業論文を作成し、公開の卒業論文発表会でこれを報告する。この間、毎月提出する活動報告書により進捗状況を記録する。					
授 業 の 目 標					
一般目標： 設定した研究テーマについて、研究方法、研究結果の解析方法、論文作成方法を学習の上、自己成長意欲を持ち創意・工夫しながら自主的また継続的に実験・研究を実行し論文作成を行うことにより、問題点の把握・分析能力を修得し、論理的な説得力のある主張ができるようになる。 行動目標：①社会や水産業が要求する課題を抽出し、その解決方法を提示できる。②調査研究計画を自ら立て、与えられた時間のなかで調査研究を進め、まとめることができる。③問題解決に必要な文献や情報を収集し、適切に分析に用いることができる。④物事の関係性を見つけ、論理的に表現できる。⑤研究室の教員・メンバーとコミュニケーションを図ることができる。⑥得られた結果を分かり易くかつ的確に説明できる。					
回	授 業 計 画 ・ 内 容				
	卒業論文は指導教員による個別指導や研究室単位のゼミを中心として進める。 ●研究課題の決定：社会的規範・倫理観に則って研究を進めるために、社会・水産業が要求する取り組むべき課題を理解し、その解決方法(調査, 実験, 分析)を理解する。 ●研究計画の立案：課題解決のための計画を立案し、期限を考えて実行する。 ●文献などの資料収集：必要な文献等の資料を収集し、学習する。 ●調査等によるデータ収集と分析：調査・文献などから得られたデータを分析・評価する ●論文の執筆：物事の関係性を見つけ、図表や専門用語を使用して論理的に表現する。 ●成果の発表：図表を用いながら成果を効果的に説明し、質問に対しの確な対応を行う。				
キーワード	水産経済、調査、データ分析、生産、流通、経営				
教科書	指導教員が適宜指示する。				
評価方法 評価基準	評価方法：指導教員の評点（80点）及び発表を聴講した教員の評点（20点）とで判定する。 評価基準： （指導教員による評価項目） ・研究の目的や社会的意義を理解し、技術者倫理に則って適切な調査などを行ったか(A, B) ・教員を含む研究室の一員としてチームワークを尊重して研究に取り組んだか (I) ・主体的に、かつ継続して研究に取り組んだか(G) ・計画的に研究を進め、成果をまとめたか(H) ・最新の専門知識を入手する努力を払い、研究に必要な専門知識や技術を身に付けたか(D) ・必要なデータを取得し、客観的に分析したか(C) ・設定した課題に対して適切な研究方法が採られたか(E) ・卒論研究発表会での確に研究成果を伝えることができたか(F) （発表会における聴講教員の評価項目） ・成果を的確かつ効果的に伝えることができたか (E・F) ・論理構成が妥当で説得力のある説明がなされたか (E・D・F) ・収集した資料や情報は適切であったか (C・D・E) ・質問に対しの確な対応がなされたか (E・D)				
関連科目	これまで履修したすべての講義、実習				
履修要件	説明会には必ず説明し、卒論テーマは担当教員とよく話し合って決定すること。				
教 育 方 法 ・ そ の 他					
水産現場や水産行政等の知見を学生自らが情報収集したものを論文として構築するように指導する。					

学 科 目 名	セミナー Seminar	単位数	1 単位	必修選択の別	必
	学習・教育到達目標：A（○）・D（◎） ）・E（○）・F（○）・G（○）	教員名 メールアドレス	水産流通経営学科教員 西村絵美 nisimura@fish-u.ac.jp		
履修年次・学期	3 年 後期				
質問受付	授業中及び、担当教官の指定する時間、担当教員の研究室				
授 業 概 要					
水産流通経営学科で取り組むことができる卒論の研究分野、研究テーマの設定と準備の仕方、研究の方法、結果の取りまとめ方を教授し、発表と討論を通じテーマを解決するうえで必要な論理的解析力、問題解決方法を学ぶ。					
授 業 の 目 標					
一般目標：それまでに習得した水産知識と新たに担当教員から与えられた知見をもとに、卒業論文で取り組む課題について考え、卒業論文に係わる研究・分析手法及び論理的解析力、問題解決能力を身に付ける。 行動目標：①水産業が要求する取り組むべき課題を見つけることができる。②問題解決に必要な方法と能力を身に付けることができる。					
回	授 業 計 画 ・ 内 容				
1 2～4 5～10 10～15	卒論研究の課題設定と研究・とりまとめ方法の概要と卒論研究の意義について理解する。 水産流通経営学科の学びのベースとなっている水産経済学に含まれる研究分野とそれによって解決できる水産業の問題について把握する。 研究の方法、結果の取りまとめ方について理解する。 指導教員の指導のもと、文献の読解や卒業論文に関する発表・討論を通じて、研究・分析手法及び論理の組み立て方を理解する。				
キーワード	水産経済 水産政策 水産物流通 漁業就業 地域振興 問題解決能力 論理的解析力				
教科書 参考書	開講時に教員が指示する。				
評価方法 評価基準	評価方法：レポート評点(100%)で判定する。 評価基準：授業目標についての理解度と達成度を総合的に評価する。				
関連科目	卒業論文 それまでに履修した講義・実習				
履修要件	なるべく配当年次に履修すること 卒論として取り組みたいテーマについてイメージを持っておくことが望ましい。				
教 育 方 法 ・ そ の 他					